

七 X 392

宗教世界 藤栗毛 卷一

英 立 雪 戲 編

明 治 十 七 年

七 月 三 十 日 出 版


發 兌 丸 屋 大 阪 支 店

馬
國
印

高

天

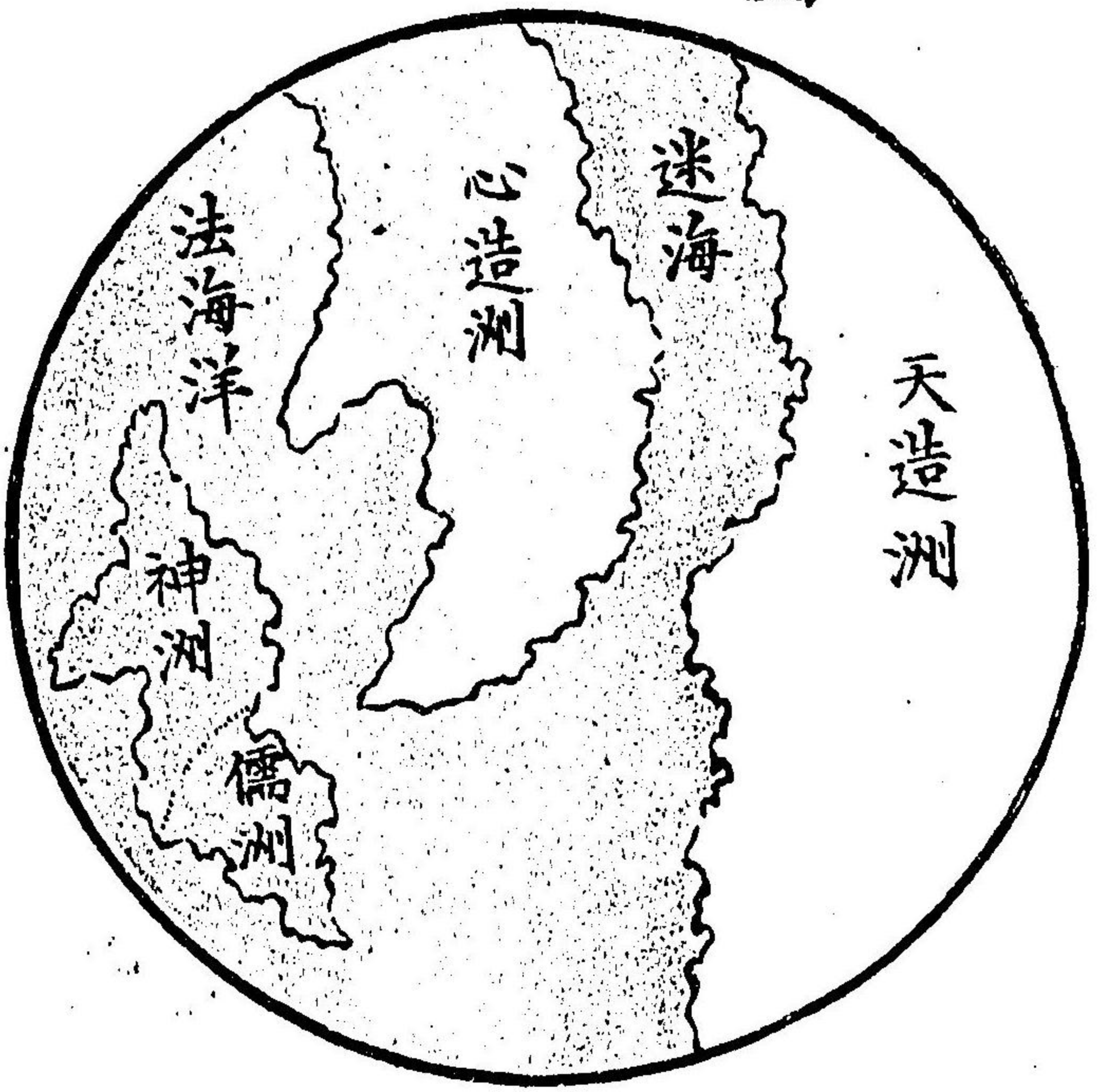
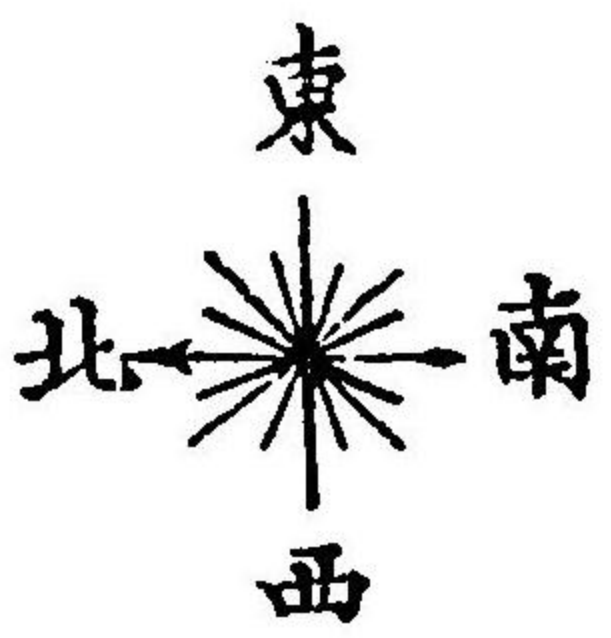
東坡先生詩集序



序

夫近古戲著家綾足京傅馬琴種彥春水已下誠
夥其書豈翹汗牛充棟則田舍莊子蝴蝶物語膝
栗毛之滑稽獨能卑近合於人情是以西洋諸國
換我東海道者比擬蝴蝶再煩南華子者有之貂
之不足也狗尾續之猶何遑而論巧與拙西京英
氏之子立雪之於此書雖做嘔十返舍主人以宗
教立意既非其故且余聞之宗門之爲義淺鮮之
一教苟欲究往々期白首况博廣高明諸宗而以
黑頭一人品躡之差過必有焉此書之可果以行

宗教世界半球之圖



宗教世界膝栗毛卷之一

西京英立雪藏編

余一日天文を觀るよ二の奇星を發見せり之即ち世界にし
 て其一を無間可惜世界と云ふ其二を宗教世界と云ふ無間
 可惜世界の我球世界に似てまた五洲に分れたり其一を荏
 苒洲と云ふ其二を蝦蟇洲と云ふ其三を愚妄洲と云ふ其四
 を照智洲と云ふ其五を兩端洲と云ふ五洲悉皆洋と接し互
 に相對面り荏苒蝦蟇の二洲に間せる海の名を暹羅海と云
 ふ愚妄照智の二洲に間せる洋の名を反對洋と名く兩端洲
 は孤り四洲の中間に在りて其背後に在るの洋を可然洋と
 云ふ各洲皆物産ありて交易甚な盛なり荏苒洲の物産
 は相違昆布遼約石ステ時計の如く時計の如何様鳴見絞油

ツ。無精針等なり其最も著名なるの出足眼又懸る目鏡か
 りと云ふ蝦蟇洲の物産の三杯の水桶失策子失望露後悔紙
 無間燈急灰考酢可然菓物矢鱈等にて其最も他洲又卓絶せ
 るの看判頭の打様なり愚妄洲の物産は安房丹保珍丹無智
 識紙附會紙野蠻紙妄ぞう牙等なり當洲よて最も他洲又其
 名を博せるは阿房多羅經翻譯て日に一日より昌榮なり
 黠智洲の物産は狡鯉我已好鱗穴角欲針非を云ふ湯啣球笑
 芋識蠟等なり當洲よは惡賢戀の流行よて爲に身を悟る者
 甚だ夥しく併氣毒氣の少も無く道德は衰頽して愛慾義は
 地を掃て滅せりと云ふ南端洲の物産の跨密藥然膽逆甜無
 精神云何様糖何如成藤當鯉鱈頭等にて其最も他洲又超絶
 は無氣力針なり既よ苜蓿洲に無精神なり黠智洲よ欲針わ

り當洲にも亦無精針ありといへども悉皆尋常一様の品よ
 してこの無氣力針の其第一等をまひる品なりと云ふ各洲
 皆數國よ分區れ一國おどの人口の凡三方三千三百三十三
 万人餘り政事の各國の適宜よして君主專制あり君民同治
 わり貴權專治あり邑長制治あり協和政治あり殊更に之れ
 か名を附んとすれと爾なり我國は君主專制とはいへども
 陛下聖主なれば闇君上よありて其政治のみ善良なるも其
 國に適せず治化を誤る如に比すれば勝りと誇り或は我國
 の貴權專治なりと雖も相國百官皆賢なれば百姓悉く蠲腹
 せり豈闇君奸臣の上に誘りて其政略のみ奇功なるも其實
 なきは比れぬ夫是非ぞと置じ或は我國の君民同治なり君
 賢よして民に智あり百政皆上下の相談處絶て一人の不幸

を鳴し不冤を訴る徒なし所謂與に艱難を共し興よ安樂を
 共にせり堯の治舜の治といへども宜く我國の治に及さ
 るへし杯と云ふ或は我國の協和政治なり夫國も君主ある
 は往昔同胞人の邪を恣まゝにし奸を逞して互に相殺戮し
 強の弱と併せ大は小を吞の亂世も當り邑長起て一區を制
 し邑長争て國主起り國主強を争て帝位し而して社會漸く
 安寧なるに至る果て然らば君位はりれ止を得ざるの位な
 り我國の如きは同胞皆其綱を慎み敢て強争せざるのみな
 らず他人を看我を看か如志事われの人と共に同謀樂われ
 の復人と共に樂み絶て利己主義の如き非ず嗚呼黄金世界
 亦近よあらん杯各々皆我を惡口云ふ者なく所謂我屁の臭
 くなしと云へる如きよしして誠に御最千万の至なり併なか

ら實の朦朧として智覺者の之を諦め又可笑次第なり扱ス
 ンメラ洲ブラアーツク國ニシテの都に兩人の異人あり即
 ち我國の彌二郎兵衛北八あり抑も此地も在や
 其所以を糺し先年魯文翁の御蔭にて我西洋を一週し行處
 戯を尽さるなく歸朝後の虛八百の自漫のみなし居しか
 或日彌二郎兵衛謂らく我既も地球を一週せり幸に經驗の
 廣を以て智識亦高を覺ゆ然ども當時は智識未だ開す西洋
 に行する者の幾も我等の外も數名よりなかりせば隨分法
 螺も吹しかと目今に至ては名もなき青書生又は商人輩の
 眼を牽て洋行せる故も人皆西洋に行することば向側へ行
 よりも容く地球を一週するこの非戸傍を巡るよりも糸易く
 黄口兒もよく彼地の事狀を諳るに至る然も我等遊歴滑

懣者を以て天下に鳴り彌二北八と云はし漸く名を聞て未
 我性質の云何をも熟知せざる徒までも勝と抱るは世の苦
 名家として循々として此儘老翁ころ悔敷次第なり聞く月
 亦一の世界ありとぞ何と工夫をして月世界へ遊行せば
 やと志願せし折柄適々米國に於て月世界へ旅行の機械發
 明ありと云へる聞き欣然として掌を拍天を仰で大に呼で
 曰く我志願漸く成就せりとせんかど直に北八を呼招き其
 志願を語り遊歴を促しけれの北八も一の奇人なれり異義
 なく同意を表し俄と裝を調へ飛却船に乗て米國又渡行爲
 けるに機械既に落成を爲けるも之を實驗せんとするに誰
 一人として月世界に旅行せんと云るものもなく大に困せ
 し際きれの直に兩人の望し任し炮中に入れ一聲高く天地

に震動して發射しける
 に如何爲けん其方向的を
 誤り月世界の隣星なる
 即無間可惜世界なる
 ンダラ洲ブラアーツク
 國ニウダの都も落着せ
 るか兩人の其方針の誤
 し事の夢更知らず一概
 月世界とのみ心得二月
 三月程の彼地此地と遊
 歴しけるかふと月世界
 是非を覺知り兩人は愛



に大に失望せしかば今更何と詮方なく泣いても笑っても致方
 なければ漸く泣の涙で當國五大洲遊歴を為始けるが一年
 八ヶ月にて畧一週し終り先年本邦フアラーツク國ユウダ
 の都に歸住して今猶彼地は滞在為けるか近來また隣星世
 界なる宗教世界を遊歴せんとする志願を發せりと

二章

夫婦二郎兵衛北八の諸君の既に御承知の如く性質至て滯
 留よみて奇明奇的劣の佳人なれど先年一回歐米を遊歴せ
 し己來思想漸く高尚に進み政事に宗教は何よまを耶よま
 れ御巧手の輕卒主義よて少宛鼠學問を爲しけるよ互よ無
 闇の義論を發し人々よ笑れ嘲らるるも例の御心好よて敢
 て頓着せず蝦蟇にも月世界へ旅行せんと思立しか月世界

には往すして誤て星世界に往けるか止を得ず該世界を遊
 歴して流石の奇人も五州各地の風俗には一番閉口せしと
 みへ或日ユウダの都ブラク間の旅宿の奥まりたる離座敷
 の内に兩人は煙草香々彌二郎の北八に對ひ彌これ北八貴
 様何と思ふかまらねと誠よ此國の奇妙な世界ではねいか
 客年己來遊歴せし國々の風俗よこの彌次さんも一番口
 閉だ世間て己等兩人の奇人を以て鳴るの高名家だか此世
 界の人なんどよ較れは余程兩人の謹直家だせ今日よ貴様
 も知て居るとかり朝飯が十時だらふ何程已等の様な長寐
 好でも十時の朝飯にと困難さをれでも直よ食のなら云よ
 が膳のみ持て來て櫃はまた彼是三十分程せなけりや持て
 こす漸く食かりりても茶の又つい持てこす己等二三日飯

時又茶を吞た事いねい馬鹿らしひ十二時頃に漸く朝飯の
茶を持て來が何でも土瓶又茶をさしてから久く打捨て置
とみへ生湯つて呑やしねい其處で中飯漸く今濟だと云ふ
様なものだそれ視ねい未だ茶を持て來いだらふまた夕飯
か夜中飯と改名するのさ今朝も此家の主人の風か笑ひ
のさ親類から急病人か出來たから急て家主又來くれると
云て來から直に行事と思ひ居しに緩々雪陰に往待てもく
出て來いから窓より覗き見るに踏張たなり又睡眠て居る
のさやゝ暫くして出來り何だまた小便坪の掃除さ漸く夫
も濟ひ手を洗ふ事と思しに其儘又手洗鉢の水更をやらか
し居る夫も好く此間中より眞背に成て穢てこたへられね
い際だから悪もねいが手早くやらがすと好く又小さな笏

て草の様ある妻蘭目懸て水かけさ遂に百べら遍程にて水
は潰たれい緩く勝手にちきける故水を汲て來ことと思ひ
しに待さもく出來らるること己等も亦勝手に往視るに何
た他に桶も深山あるに強て輪の抜かりたる桶を油重に
も輪更をして居のさ夫も出來上り直に水を汲かと思ひま
た釣瓶繩の縛更さやつと水も汲水更も出來て此度の直
に往事と思ひ居し又風圓を出して晝寐をやらかして濟た
今の前日を覺し驚た風俗よて漸く出往しか實に仰天て濟
たよ夫もそふたらふ急病を報知に來た使か店て手代と將
基を差指て居と云ふ様な景氣たから無理もねい何と皆氣
の長奴輩た北なる程其奴の大笑た併し義兄も始から終迄
透一視て居たとは斷分氣も短もねいせ己等此間中より毎

夜去年來の五洲遊歴の手帖を視て居る實に可笑てまたへ
 られぬい其中にも最も奇妙なるは愚妄洲の阿房陀羅經翻
 譯さ彼様なものを翻譯して日々昌榮との實に不思議では
 ぬいか日本なんだ子供でも知て居るに夫を請求めて重寶
 がるとは實に至愚の世界だのふまた點智洲の惡賢戀には
 仰天たゝるふ何れも抱服世界だ已等思ふに此世界の奴
 を三四人日本へ連歸て見物でも出たら隨分金貰か出來
 様と思ふのさ併今朝已等も脇議あると云たが云何事か
 彌何の外的事でもね此間一寸貴様も話と過般何處だつ
 たかて異人か咄して居た隣世界の宗教世界へ遊歴してい
 と思ふのさ北宜らふ併如何して行のだまた地球より爰に
 來よふと間違ちや困却た何か好く趣向でもあるのか彌別

段好く趣向と云つて己等の知らぬと此頃當地に輕氣球の
 發明か出來たからそれにでも乘て往と思ふのさ北己等も
 ふ其様な危險事の御免たぐ併未輕氣球の知らぬいか先年
 地球の英國もあつたか義兄と兩人て氣車に乗たらふ其時
 ステーションを間違して當徹もぬい處迄往て殆ど困却し
 た事かあつたらふ今回も亦勝手も知れぬ輕氣球なんどに
 乘て云何様な愛目に會も知れず己等其様な事ハ先般の大
 炮の間違から一層困くだまた間違て地獄でも往て見なそ
 れこそ大變な義兄其様な事の止よして早く地球へでも歸
 る趣向を爲様たぬいか彌馬鹿云ぬい何程相違たて地獄な
 んどへ往てたまるものか貴様も一匹の人間だぬいか万物
 の靈長と云るものがよしや間違たて云何あるものか

貴様此世界の景状を何
 と思ふぞ客年來より而
 人て遊歴せし事なれり
 大畧其人情も解せたら
 ぶか唯殺風景なるを面白
 のなんぞと云て居ちや
 云何も貴様に似合ねい
 事たと思ふよ五洲悉皆
 其人情の進各利好張た
 る事り云へども其實總
 自治精神に暗きか致す
 結果さ貴様自國も居る



時分は此點に常々議論を爲したでいねいか己等此點に少
 し云度事かある茶など呑て聞てくれいと自分も一口茶を
 呑ける

三章

彌二郎兵衛は再び北八と對ひ彌凡各國の自滅するは概道
 義の衰頽と由れり國家の富強と謀るの實に道德を擴張す
 るに在りとい社會一般當時人の容を處否容ざるを得ざる
 確論にして之亦貴様の持論もあらずや而て貴様の信仰す
 る基督教に一視同仁を主張して他を視ること自の如く爲
 よとの教もあり森羅万象は悉皆上帝の造作せられしと云
 へ現又舊約全書創世記中に衆星を造れりと云へる事もあ
 れり星世界の人民も皆同胞兄弟なり其同胞兄弟の五里霧

中に狼狽して真理の何物たるを知らず日夜破道徳の所業を積み罪に罪を重ね悪に悪を植へ今や上帝の嚴罰を以て將に大洪水も近にあらんとするの今日なるをよしや基督教の信徒よあらざるも少々慈悲あるの人はなきか袖手し傍觀すべきやましてや愛を以て誇稱の基督教信徒にして川對ひの火災の如き見流て可ならんや我等はまた基督教信徒にあらざれども則ち佛教の信徒なり謂ゆる世界中森羅万象は悉皆衆星の業感力にて能造せしものども云く又心の所造とも云くて兎も角も十方世界は佛教の域中なれり我心の外に一物をも見ざる教なれり我心の外も他人なし他人の外も我なきと信すれり此世界の人民日夜惡因を重ねは其果必ず惡報を受けんこと鏡に照して視るより

も猶明了なり何すれど自己をも利し他をも利するの教法信徒にしてまた徒ら見遣すべけんやとは云ふものゝ兩人どもに未だ兩教の真理に深からざれば其實曖昧不確たる信徒なり故に愛よ一大慈愛心を發し宗教世界の實地を見聞して退は自己も早く浮世の迷霧を脱却去り進は此世界の人民を始め上下十方の有情をして限なきの樂と限なきの生命とを持たしめんとす何様説き出しての浮屠師か卑劣かの説教の様でアトメンとか南無阿彌陀佛とか云はなきやならぬ様だか己等の精神の界此様なものだ貴様これでも矢張否だと云ふのや北いやもふ義兄の今の話なり精神には己等殆ど韓信勝を出て三度禮して感服仕りやした何の否を申ましよ義兄の後に隨ひ何の夷迄も御供仕る

と云ふと眞而腐て居やすか實も已等涙か溢れたよ耶蘇基
 督の我人の罪も代りて礎木に懸られた事を思ひ又使徒達
 か教の爲も辛苦せられたに比較すれば容易な事だ已等最
 早決心した何時でも出立爲やす是迄義兄も逆意た事のね
 いのに分明的事を愚智を云つて大變喋々して面目ねい何
 卒許可てくだされ彌何のそればかりの事を容許も許さな
 いもあるものか而て念の爲豫め云て置かね是から宗教世
 界へ往ても私の交際の彌々厚くし喧花なんどの充分も爲
 ぬ様よして實は眞理に二つあきものなるも目今では貴
 様は基督教を眞理とし已等の佛教を以て眞理として横目
 で諦ると理か二つある様なれど實の何れか一なるものに
 相違ねい故に宗教の點での充分も互に逆意て是を將來の

經驗に調して理ある處
 に順のまばならねい併
 し夫か爲も私の交情を
 絶様の事は随分せない
 よふも爲様だねいか北
 「そらともく併義兄の才
 よして基督教の眞理あ
 る事を知らずして偶像
 敬なんど迷醉爲て居
 ざるか氣の毒さ彌成程
 佛教の眞理を知らず經
 卷の一冊をも聞せざる



人より諦れい即ち石木像を見て一概に偶像教と云ふは無
理もねい併西洋なんどよある誠の偶像の「モイソト」の像を
拜する杯とい大相違さ併此事を咄せい一朝一夕の談とい
尽ぬ事將來の遊歴中活物も調して咄ふかまた貴様は基督
教なんどの妄想よと認見せる上帝なんどを恐懼るとい又
氣毒千万だ北何の上帝さまかある事か妄想だの認見なん
いじやあるものか確乎とした証事のある事宇宙の森羅万象
の絶て人間の造作ことい及めい人間よ其智慧も限りあ
ればなり其万象の嚴然として備具り我地球を始として日
月星辰の其位置を異違す四時運行せる其之限なき智慧
を具へ玉へる上帝ある所以なり然るも義兄は之を妄想と
云ふささるの亦似合しうらざること御承知でもあらふか

例せば義兄の所持して居る時計だて其造作者は誰なるか
は知らず併なから其機械備具て一時の六十分一分は六十
秒と短針長針の其度敷を違す時間を誤らざるの機械の偶
然にい出来めい喩ひ其造作者の何國の誰人なるを確乎と
い知れずとも必然其發明者のあるに相違ない様のものだ
彌成程相も變ぬ陳腐漢の例を出すねい併先一ふく爲なさ
れ已等も其點よは随分議論かあるのだからと同しく煙草
を齋よける

四章

彌二郎兵衛の微笑と彌今貴様の云つた事と一應は其様な
ものた併今云處の時計も例ひ百人千人集ひ來るとも道理
のねい事の發明も出来めい已等だつて眞更發明者のねい

と云ふのだねい道理^り的^{てき}之^の已^に等^しか云^ふ發明^の者^{なり}また道理
 あるも之^を道理^と因^て發明^{する}者^かか^くはまた出來^{めい}
 即^ち因^縁合^ちして月^日星^辰は愚^か未^だ眼^界も愚^然ざる地^獄
 も極^樂も天^國も煉^獄も天^主も惡^魔も幽^靈も怪^物も皆^出來^る
 るのさ併^し道理^{の外}も道理^を立^て強^て上^帝を妄^造し虛^無
 一^物の處^{より}道理^も時^間も何^も耶^も上^帝の一言^下も忽然^と
 として現^出たと云^ふから笑^ひのた先^貴様^に一^步を讓^りて
 道理^{の外}に上^帝ありとしよふ果^て然^らば道理^上より上^帝
 の有^無を語^る事^は出^來めい然^るも時^計の例^を以^て上^帝の
 有^無を知^らさんとするも實^は難^いのだらふ已^等西^洋遊^歴
 中^英國^であつたか彼^の通^{さん}と同行^も或^る教^命へ説^教を
 聽^聞も往^たが一人^の卑^沙が上^帝の靈^智の入^心を以^て

之^を推^測すべからず上^帝の性^質は人^性を以^て之^を較^知す
 べからず而^{して}神^威神^爲の入^爲以^て之^を比^はべからず人
 威^以て之^を計^るべからずと云^ふ居^しが實^に其^様なものだ
 らふだから己^等の益^々信^せないのだ馬^鹿らしい北^其通^だ
 上^帝の唯^妙智^力を以^て天地^万物^を創^造玉^ふ上^帝の妙^智力
 は實^にこれ天地^万物^の元^始なり何^すれぞ人^間限^りあるの
 智^を以^て上^帝の妙^智力^を計^る事^が出^來るべし我等^が救^主
 耶^蘇基^督汝^の愛^を信^せせ反^て害^を爲^もの幸^に汝^の愛^を以^て
 て之^をして悔^改めさせ共^に天^國よいたらしめんことをア
 ーメンと祈^りければ彌^二郎^兵衛^の大^お笑^ひ彌^ハ、、何
 を云^やがるのだ併^感心^く北^己等^誠に義^兄が氣^の毒^でこて
 いらねい無^法に上^帝を消^遣から若^方一^上帝^の嚴^罰でモ

蒙りやしめいかと思ふと已等哀ひのさ併靈書にも爾に敵
 するものい愛せよ爾を狙ふ者の祝せよ爾を害する者に
 祈禱せよとあれば已等義兄の爲に祈をも爲よふけれど竹
 馬の頃よりの朋友が終身はせうなりからなり一處も居ら
 るゝが死なば離れぐに已等の天國も往て限なき命と限り
 なき樂とを得らるゝか義兄は地獄に墜て限りなき苦を受
 るかと思へば已等哀しくて困へられぬいと大聲にてチウ
 くと泣ければ彌二郎兵衛の感服して彌いやはや貴様の
 精心で親切にの殆ど感服だ其確手たる精神を以て早く妄
 想宗教を脱せしめ真理の有る處を知らしたら餘程益にも
 ならふに可憐上帝とか耶蘇とか迷ひされて頓て慄忍め
 に會ふのが不慙だ 北義兄未だ其様お罪惡な事を云ふはか

已等義兄が上帝の嚴罰を受るかと思ふと身の毛が慄然て
 くるのさと亦もさめぐと泣く 彌何の空無もしぬい上帝が
 云何して罰を當るものかよし上帝があつた處が愛の至極
 でのぬいか已等理に逆へば罰せられ理に順へば賞せらる
 と信ずるから道理も逆ぬ限の上帝だつて耶蘇だつて罰
 する事は出来ぬい 北未だ其様な事を云ぬのかと益々大聲
 よてチウくと泣ければ旅宿の家主の何事やらんと訊き
 来る抑此國の人種の脊長皆大よして頭髪春の半に下り髭
 毛亦八握に餘れり衣服の往古の支那風にて容貌皆鬼神の
 如くなり日早入相の鐘の音も冥に聞も薄暮頃硝子障子の
 外面にて何心なく覗ひけるよ北ハの見えて然北そりや上
 帝さまが出現玉ふた主怒めくア一メモくと叩頭爲けるよ

秋風殺と吹來りて頭髮鬚毛を亂しければさながら鬼神の怒れる如く北八は益々愕き北「アーメン」主我を怒み玉へ主我を怒み玉へと切に拜す相貌を見て何事やらんと思ひ居し彌二郎兵衛も心付き亦も愕然起立り蝙蝠傘を右手に振上げ大音聲に「彌」汝何者なるぞ我を誑す汝巧に鬼神の相貌と現すと雖も何すれぞ我日本魂を驚す事を得べけんや鬼神の之れ理の至極靈妙を名けて鬼神と云ふ儒の所謂鬼神を敬するとの自己直として天地靈妙の鬼神と對すれば正直の頭に神宿るの俚言の如く祥の來らざるなく瑞の輻らざるなく是れ之を鬼神を敬すと云ふ奈何れぞ汝が如き怪物に對し誰か之を敬せんや誰か之を恐懼せんや推察し我輩の前刻より北八と共に上帝の有無を語れり故に汝愚にも

怪き相貌を現し我輩をして恐愕せしめんとすることぞ諱々しき所業なり汝早く本体を現し退散すればよし不然く猶我輩を誑感せんとならば目に物見せてくれんすと將又一打と爲むと爲けるを家主は驚き聲をかけ「主」御客様方拙者奴で御座ります此家の主で御座ります神さまでも怪物でも御座りませぬと云々つゝ障子を開き入來りければ兩人の二度驚然兩人「やあ御家主であつたかと彌二郎兵衛の今更に拍子も抜けあつけに取られし面色又て振上し腕も無骨と彌「すりや御家主であつたか私しはまた北八と上帝の有無を云て居たらぬ狐狸の其虚を附込て鬼神の相貌を似して私し等を誑すのかと思ひやした併誠に鹿粗を爲やして御免下され之レ北八貴様未だ慄然居のふ上帝かと思や

がつてアーメンくと見
 苦しひ北已等それでも
 義兄が無法と上帝を惡
 口するから恐ひくと思
 て居る矢先へ嚴手ひ相
 貌が現れたから上帝の
 我輩を罰せらるゝのか
 と思て夫でアーメンく
 と救を祈たのだ「ハ、ハ、
 、私の随分怪物よは見
 へまじよか神さまよ見
 へまじたどの不思議で



御座ります併夫は誠に御氣毒さまで御座りました私前刻
 外より歸り勝手に居ましたら何か御泣聲が致しまする故
 御病氣でも發り御苦かど察しそつと覗ひましたら御一人
 は切に叩頭をなされて神さまくと仰せらるゝま御一人は
 起立なされて鬼よ怪物と仰せられて私めがけ將打拵と
 なさるゝ故私も實の仰天致しやした彌左様でありやした
 か夫の甚だ御氣の毒併長々御厄介となりやしたが明朝が
 ら復暫く他行致す積でありやすが明日になつて彼是せな
 い様も勘定あら何も耶も願度ありやす生左様で御座りま
 すか併何方へ御越で御座ります彌千渡今回は遠方だ宗教
 世界へ往てこちらかと思ふのさそれは大變御遠方へ其儘
 地球へ御歸りで御座りまするかまた此界へ御越で御座り

まするか何卒御氣嫌よや御越なされませ。彌何れども再び此地へ來る積さ併し餘程暗くなりやしたたが點燈を願度わりやすと云ふ。家主も雇人を召び「ランプ」火を點しそれより兩人は夕飯をも濟む明日の未明も出立せんと仕度られぐに調へ置き宵より臥處も入けるが寐られぬ儘といつぐと北八の彌二郎兵衛にむかい「天主かと思へば宿のてい主なり此様な事は以後の嗚呼免」と例の如く滑稽を詠じければ彌二郎兵衛もまた「異人見て鬼人と思ふ我心こころ笑しくひとり佛ぶつ」と出鱈目を口詠。暫時の互に笑ひ居しがいつしか膽吹高らかも朝日照す迄打臥ける。

五章

扱も先年地球世界西洋の米國も發明せる月世界旅行機械

の一回彌二郎兵衛北八を驗せし已來勢價愈々五洲も高く其方針を誤り居る事は毫も察せざれば一概無事。月世界へ往くと乃み心得其後衆議し理學者を彼地世界へ遣し該地にも亦同機械を備へ往返自由ならしめんと或日兩人の理學者を炮射しけるも同しく月世界への往ずして可惜界ズンダラ洲ブラアーツン國ユウダの都に落着す爰も兩人の復大も失望しけるがさりとて今更詮方なく熟々旅行機械の不完全なるを喻り大炮製造を止メ輕氣球數槽を製しこれに乗じて地球及其他の世界へも自由も旅行するの發明を爲り之彌二郎兵衛北八の兩人五洲へ遊歴せる不在中の事なりき扱また彌二郎兵衛北八の兩人の今朝思はず寐過して驚き泡て仕度整ひ旅宿を出て海岸通を歩み來る路

々互に咄し合ひ北義兄彼處に見ゆる西洋館が輕氣球のあ
 る處かね而て其機械を發明せる人の矢張當地の人かね彌
 「なんの貴様未だ知らねいのか地球の米國の人だ已等兩人
 の此地へ来た後理學者兩人が月世界へ旅行する目的が同
 じ之間違て此處へ来たんだ北ハ、ハ、ハ、いつの面白夫で解
 せた何でも其様か事だらふと思たよ當地よは輕氣球發明
 どころか車一輛も好く造りやしねい併米人は已等を知て
 居るかも分らねいせ彌うりや何とも知れねいと互に話し
 つゝ早や機械所に着さけるよ米人の兩人を見て米汝た日
 本人であります汝米國で私拜顔しました去年汝た此處へ
 来ましたた誠よお氣毒私し本年此處へ来ました汝たと同
 じこと彌汝た此處へ来ました私し喜ばます汝た輕氣球乗

すか私し宗教世界へ行
 ます米汝た宗教世界へ
 往ます宜しひ私し輕氣
 球相違ませぬ汝た安心
 北私し宗教世界へ行ま
 す輕氣球乗ます「メラ
 幾何「メラいりませぬ
 汝た誠に御氣毒私し申
 譯ありません北汝た感
 心私し喜ばます義兄感
 心だねいか先に已等兩
 人を困らせたから其酬



無料のりで乗ると云ふのだ 彌のり成程實に感心だ併し何時頃よ
 上るか尋て見な 北のりかつと承知く 汝た輕氣球何時よ上り
 ます 米のり私し輕氣球十二時三十分上ります 唯今十時であり
 ます私し館務のりありません 汝た私し館遊のりひませんかよろし
 ひ 北のり義兄今十時だろふだ輕氣球の上るの十二時三十分だ
 と而して館へ遊のりに來と云つて居るが一寸往て見よふだね
 いか 彌のりそいつは随分面白からふ併構のりやしねいかね 北のり何の
 構のりふ事があるものか而して何ぞ亦變のりた面白ひ話もあらふ
 汝た務ありませんか私し汝たの館遊のりに往のります 米のりよろしひ
 私し館務のりありませんと米人は先に達のりて我館の方へ行く兩
 人の後よ隨ひ往けるよ米人は我居間よ聘し洋酒のりなどを進
 め切に饗應しけるが北八の少し酔も回り米人よ向ひ北私

し基督教信じます 汝何を信じます 米のり汝た宜し私し基督教
 信じます 汝た宗教世界へ行ます宜しひ日本人上帝さま嫌
 ひます 偶像教信じます 御氣毒 北のり私し偶像教信させぬ上
 帝さま信じます 米のり汝た宜しひ上帝さま信じます 仕合せ汝
 云何にと彌二郎兵衛乃方に對ひ問ければ 彌二郎兵衛も一
 杯氣嫌にて私し基督教信させぬ 佛教信じます 私し上帝
 妄想信させぬと云へけるに米人は希有なる面色よて 米のり
 汝た偶像教信じます 御氣毒 朋友基督教信じます 仕合せ云
 へければ 北八は揚々として 彌二郎兵衛に對ひ 北のり義兄好
 加限に偶像教の妄信を覺のりしたらどうだ 誰一人として好
 と云ふ者あらずやしねい 適々信する者の老翁老婦か痴漢除
 りた不品のりねい 馬鹿云へねい 兎角に貴様等道理の有る處を

信せずし人よ依て事を爲すからいけねい日本國にも貴
 様の様な者が數多有るから閉口は西洋の者と云つたら何
 も耶も好く様よ思つて日本人の孝心者よりも米國人の不
 孝者と尊び東洋人の忠義者よりも西洋人の盜賊を譽め順
 て日本人の道理を聞ても米國人の無道理を好み西洋人の
 屁の臭くねい様に思ふけれど矢張眞のさ日本でも善い物
 の矢張何國よ往ても好く惡い物は何地へ往ても惡いはず
 老翁老婦が信じて居からと云つて一概惡いとも云はれぬ
 い兎角よ人に依て宗教を信する様では未だ眞實の物で
 ねい北「成程一理ある様だが一概ちうも云はれぬい佛教よ
 も因人従法と云ふ事があるではねいか多く識者の皆基督
 教を信じて居から眞更識者が無道理を好んで信せしめぬ

彌「成程佛教よも因人従法と云ふ事もあるから悉皆人よ依
 て惡いと云ふではあけねと當今での内外の各教互よ我の
 理なり他は不理なりと競争の今日なれば紫の朱を奪ひ鄭
 聲の雅樂を亂し玉石共よ混じて横目で何か其正理なる
 を知らず貴様基督教のみ識者が信する様よ思へども佛教
 も亦随分廟堂の識者紳士社會も信じて居るよでいねいか
 また西洋人の皆基督教信徒と云ふでもなからよ已に彼國
 でも無神論者と云ふがあるではねいか有名なる「スペンセ
 ル」「トウマスペイン」「ミル」「ガルレナ」等其他理學者の夫が
 爲に殺戮せられ志もあり没財せられしもあり併ながら又
 識者の之を信するもあり故に佛教信徒にも亦識者ありて
 何れを是とし何を非とせんに實に縁なしよし縁あるも例

ひ識者と雖も理を見るの點に至てはまた格別なるもの
 して偏頗せんにも限らず故に寧夫等乃人に依頼せんより
 の自己道理の有無を探り理のある處之信せんには是程確
 手たる信仰はなからふ故に已等の如きは人より依頼して信
 仰するど云ふ様な事いせないので互に論ずるを米人の
 聞き 米「汝方兩人議論します私し薩張分りません私志偶像
 教嫌であります汝偶像教信します毒氣馬鹿々々云々け
 れば彌二郎兵衛は大に立腹し 彌「私し馬鹿ありません基督
 教妄想であります汝馬鹿 米「基督教妄想ありません汝た上
 帝さま罰あります私し怒みます御氣の毒 彌「私し罰ありま
 せん汝た上帝さま信じます妄想であります汝た誠に御氣
 の毒私し馬鹿ありません汝た馬鹿」と云へければ米人は

顔色を變し 米「私し馬鹿ありません上帝さま信じます汝た
 誠に御氣の毒と云うつゝ目を閉頼は手を當て（ア）リル（イ）
 ヤア（ニ）ル（イ）ヤ（ア）（メ）ン（と）稱へければ彌二郎兵衛の自
 分の悪口で云とれしと思ひ益々立腹何思ひけん倚子よ
 悪りしを起立せんとしけるにテーブルを力と爲せしが如
 何なるどたんにや机上に在るコップの下は轉げ落微盡に
 破てビールは溢れて地は滴りけきは米人の大は驚然 米「汝
 た禮義知りません日本人無法く私し容しませんと持てる
 ステッキを振上彌二郎兵衛を打とすれば彌二郎兵衛は焼
 氣となり 彌「こりや赤髯奴汝云何するんだ自己の悪口を云
 やがつて不知鹿粗を爲たが氣入らないとて撲なら打てい
 汝等が如き縁眼奴は我日本へ入込でから爲様ぬぬい魔法を

弘め日本魂を柔弱にやうじやくと爲やがつた同し日本人でも自己おのれの如
 きは汝等うぬらの如きと馬鹿にさるゝ様な此彌二郎兵衛だねい
 どと云ふに米人の益々怒り米馬鹿々々日本人馬鹿々々云
 ひつゝ將又兩人が打合としけるに北八きたやちの驚き透てゝ米人
 を宥め北私きたひし朋友とも無禮する不都合汝た宜しひ私わたしし謝罪あやます
 米汝宜しひ私わたしし赦免ゆるませせん汝た朋友とも無禮する彌何やだ赦ゆるさ
 ねい汝等うぬらは何の赦してもらふも何もあるものか撲なら打
 てい北義兄きたぎけい何と云ふ事だ往昔むかしなら随分我漫を云つても云
 へが今では義兄も宗教信徒とも云へるゝ身で少位せうゐの言ことばの
 相違さかで其様に立腹する様でい之から宗教世界へ行て云何
 様な辛酸しんくがあらふも知れないに兎も堪忍こらの出来めい馬鹿
 らまいと宥めながら米人に對ひ北私きたひし朋友とも謝罪あやまます御免

くど切に米人を宥め漸おだく兩人を倚子よりこと懸らせ北義兄無念
 にもあらふが其處そこが大望たいぼうある身の堪忍こらだ千金の子は盜賊
 と死せずと云ふ例たともあり韓信かんしん市人の勝かちを出るに比較ひかくれハ
 唯一人の米人こめと謝罪位あやまの難作がたもねい兎兎とと短慮功たんりよくを爲さ
 ずだ彌成程やちぢやうぢやう已等の心得違ちがひた好く己を宥てくれと此様
 か赤髭奴あかひげ一匹位ひとひきは撲ぶくつして濟たすてもいゝのだが大望たいぼうのある
 身だから赦して遣ふよ北きたそうともく大望たいぼうの成就じゆうじゆ爲上では
 云何いともなること一寸一言いっしんいっごん謝罪あやまな米汝こめた朋友とも謝罪あやまませぬ
 私わたしし赦ゆるしません北きた宜しひゝ今謝罪あやまます義兄ぎけい一口何とで
 もいゝ一寸謝罪あやまなせい此處こゝが鎮しずらねいからと勧められ無
 念ながら不肖ふせう無宵むせう彌二郎兵衛やちぢやうべゐの米人こめと對ひ彌私やひし無禮
 謝罪あやまますといゝけるに米人も満足まんじつ顔にて彌汝やちた謝罪あやま宜し

ひ私し赦ますと漸く
 座も鎮りて互に和合け
 語ふ内早くも柱上の時
 計十二時を報けれ而人
 の館を辭し外路へ出て
 茶店に入て仕度測へ再
 び機械場に来り見るに
 今や磁氣球も上昇せん
 とする有様ならば直に
 打乗ける間もなく笛聲
 と諸共に球の虚空へ
 昇ける然るも彌二郎兵



の先刻米人に謝罪せしを如何にしても残念なれはた何
 となく鬱然と語をも云のでありけるが何か思ひ出せし顔
 色にて北八已等絶句が出来たと球上より下を見おろし

方外悠遊 豈爲身

丈夫意氣速於神

地球上事君休暇

元是地球上人

と吟じければ北八も亦高聲に

男兒四方志

報國一精神

勿以蜻蜓意

也看化鵬人

と互に吟聲の其間に磁氣球の飄然と遙に雲間に入にける

六章

颯々として風鳴り、颯々として輕氣球の遙々、可惜世界を隔ること數千里の外に出たり、晝の如く夜の如く明ならず闇ならず、四望渺々として遙々、衆星の圍繞せるを見るのみ、寒暖時々に来り、須臾も其度を變し、爲も身体の量を失んと、そ空氣頗る薄弱なれば、氣息自から自由ならず、言言互も發すれども、空氣の流通稀なれば、之を聲得も復稀なり、嗚呼人の一回此境に至れば、或は余が信ずる處の宗教の眞理をも知ることわからんか、之作者の觀客に對するの老婆心なり、扱も彌二郎兵衛、北八の兩人の前刻よりして四方を望み、視又互に話し、それども共に返答の稀なれば、北八の不審顔にて大聲よ、北義兄已等先刻から色々話し、それども返事のぬいの

の俄も、鮮州にでもなつたのか、彌も、そつと貴様高聲よて云ふが云、己等には少しも聞やしぬい、貴様の平常に馬鹿聲を出す癖に、何故其様な聲ひ、聲を出のだ、北義兄の餘程笑し、ひ此位な高聲を出して居るに、未だ弱ひの何だと云つて居るのかい、よく義兄の鮮州になつたんだ、彌それみな未だ其様な弱々な聲で云ふから、何を云つたんだ、己等に少しも聞へぬい、北ハハハ、何と云つてるのだ、己等の聲のみ、弱いのなんの云て、義兄は今何を云たんだ、口ばかり悶々して、可似瘡癩の様だ、困たものだ、彌貴様、愚頭く水の中で尻を垂る様な事を云はずと、確手言を云へ、前刻から何か云ては、笑ひ笑ては、何か云、口ばかり悶々して、氣味の悪ひ奴だ、北また義兄何か云てるか、面白ひ事だと、北八は獨り笑居しが、空氣

れで分明た前刻之と話爲て居た時聲が弱ひくと思つて居
 たは誤りだ聲の弱ひのだねい聲は平常の聲だが空氣が薄
 くして流通が衰なうら夫で聞へないんだ北已等亦義兄が
 聾洲もなつたんかと思つたよ何程高い聲出ても聾々云つ
 て返事爲さいから實に困たよすりや今空氣が厚く爲たん
 だらふから何かの世界も近寄たんだらふね彌左様さ彼處
 も大なる月の様な物が見ゆるがあれが世界だらふ併貴様
 先年已來の旅行日記を詳細に書記て居るか豫て英立雪が
 日記を送てくれと云て居たから幸に輕氣球も出來送達に
 便利に爲たから送てやらふよ北成程其様な事をいつて居
 たかね併可惜世界の事はんの已等の手扣のとだから益
 も立ないが以後の委曲書記して置はさ彼人も餘程宗教凝

だねい彌とふだ随分熱心家だが未若年だから致方ねい其
 様の事の云何でもいゝが貴様の基督教を信じて其信仰の
 目的なり一應のところを聞かしてくれなさい宗教世界へ
 往てから好心得ともなるから北成程已等其委曲事知ら
 ねいが貴様も知て居る通舊約全書新約全書を以て靈書と
 し其舊約全書創世記より申命記の終迄を之を摩西五經と
 いふ爲重無比の靈書にして而して其他該書も列する處の
 物の他豫言者の教耶穌基督を豫言せる者にして熟く其教
 を案するに先上帝愛を以て宇宙一物もなきより天地万
 物を造作玉ふ爾るに上帝は人間生洲の作業を考へ罪ある
 者は永遠地獄に墮せしめて眼なき苦を受さしめ玉ふ然る
 に本我人を自由の身に造り玉ふが故に我等今信仰に因て

天國ももき限なき生命と限なき樂とを授け玉ふ耶蘇基督
 は我人罪惡の爲に必ず地獄と墮るを愍み猶太へズレへム
 の賤民マリアと依て降生し玉ひ猶太教の妄信を攪破せん
 が爲生涯教の爲も身を苦め或は病める者を癒し或は鬼を
 逐ひ或は死せる者を蘇生せる等數々の奇跡を顯し玉へバ
 猶太人の其奇跡も驚き其上帝の子なるを知らず反て之を
 惡魔と心得祭司の長等と談り百法苦しめし後遂に「バイレ
 ー」に誣告して基督を磔殺す耶蘇の一度は死し玉ふと雖
 も三日目に蘇生し玉ひ其後四十日間使徒の前も顯現玉
 ひて道を説き後「タニヤ」に至て天國も昇玉ふ之即ち我等
 が救主にしてベスレヘムも降生し玉ふもイザヤの豫言も
 應じ死て三日目も蘇生し玉ふもヨナナの豫言も應じ其

他生涯の行事は皆諸豫言者の言も應せり然れば耶蘇基督
 の我等が爲の眞の救主にして罪なくして磔木懸り玉ふの
 則ち我等が罪惡に代り玉ふなり故も我等今基督の名も依
 て信仰し基督の名に依て救る事を得るのさ其他基督の生
 涯の奇跡上帝の默示等皆我等が信仰の目的にして佛教の
 如き空々寂々風を捕へ影を促す如きの比もあらず未だ色
 々澤山あれど此邊で濟て置ふも彌成程聞けば一寸道理が
 ありそうだが實は其れが眞の風を捕へ影を促す如き空論
 さ併貴様に理屈を云たて爲方がねいから埋屈のいなねい
 が信仰の目的も就て少く話をふから聞てくれなよ凡基督
 教を問はせ佛教を論せず此等を信するの目的をして若奇
 跡不思議に依らしめば基督の好奇跡を顯せざと雖も今日

の傳教師達の未だ奇跡を顯せしを見ず往昔各宗の祖師達の好不思議を顯せしと雖も現今の僧侶の未だ不思議を顯せしを聽かず然らば今何の不思議を依て之を信せんや若又他信徒の智者不智者を以て目的とせん基督教信徒にも識者あり佛教信徒にも亦智者あり然らば復何れを是とし何を非とせんや若又國の開明未開を以て目的とせば往昔文明國たる印度支那も今の退却して遂に歐米も及ばず故にまた往昔歐米の印度支那も及ばず夫が爲宗教の善惡を論じ信仰の否不をいは復時々宗旨更を爲ざるを得ず甚間敷次第なり我日本國にも往々其様なる論者ありて我等の恒に恥る處あり併貴様を其様なる類といふよの非ず唯希くは世間の人の其信すべきを信じ其信すべからざるを信せぬ様にしてくるれば宜しのだ復云何やら空氣が薄氣になつたと見へ言が云く悪くなつて來といへども最早北八は聞へぬやみへ返事さへなさで問をなしよける

七章

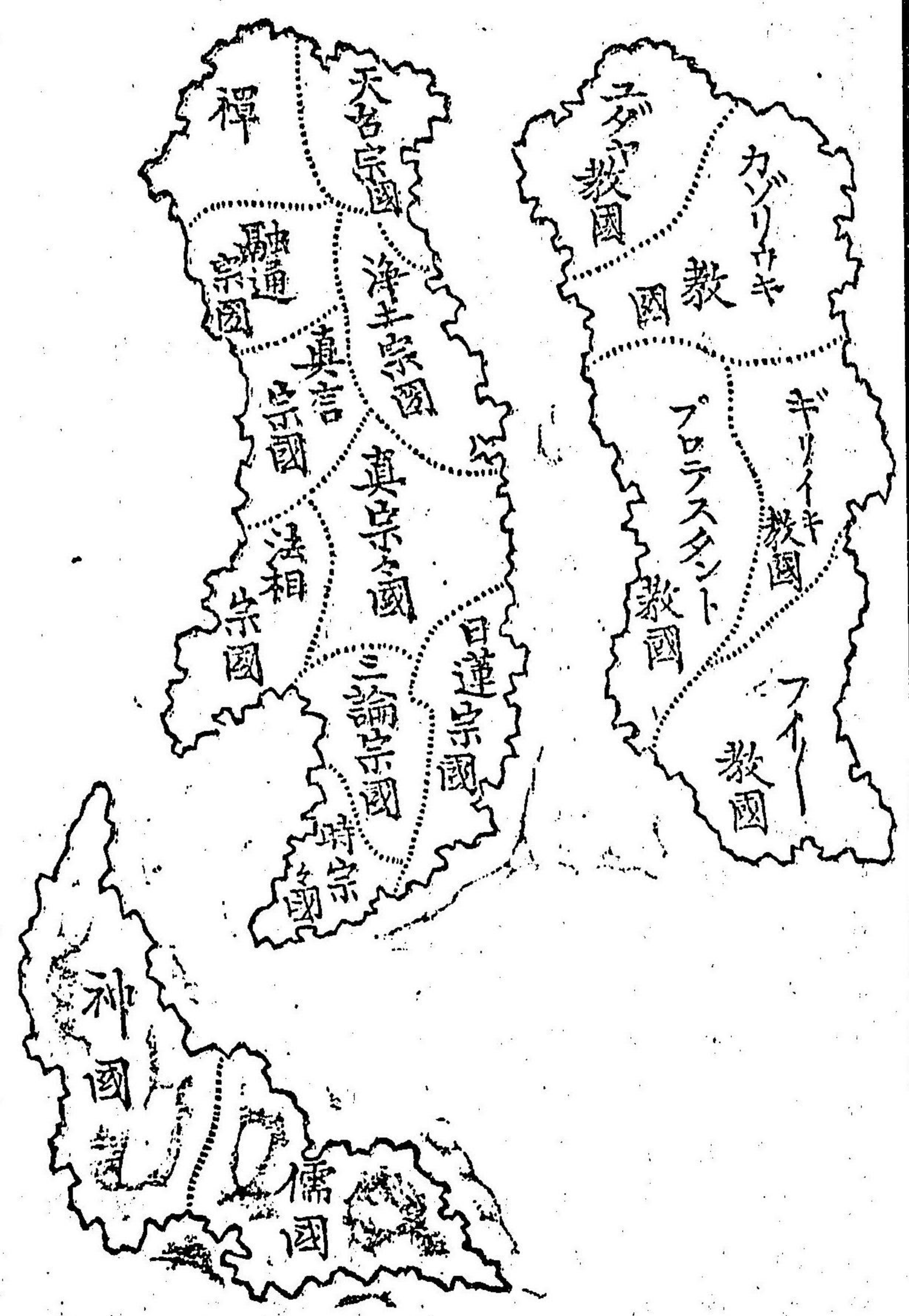
復も空氣の作用より彌二郎兵衛北八の兩人の脚絶すること須臾としてまたも蘇生し凡そ十日餘とおぼしき間の夢の如く無性の如く醉るが如く睡るが如く死生百回流石剛漫なる兩人も今は殆ど持て餘したる其折から異香紛々として鼻を穿ちチールエーの音は遙に雲間より聞へければ初て兩人の人心持になり何事ならんと球上より覗ふ間もなく雲散じ霧晴渡る其中に一世界の現れければ何の世界なるぞと問ひけるよ即是宗教世界なりや兩人は大に喜

び最早間もなかるべし
 と辨當箱や足袋手拭何
 やら耶やらを抓集め仕
 度爲ける暇もあらせま
 ヒユード笛聲の音もろ
 とモ宗教世界へ着しけ
 る抑も宗教世界之六大
 洲も分區れ其一を天造
 洲といふ其二を心造洲
 といふ二洲皆數國も分
 れ所屬の嶋嶼數多く先
 其兩洲の國名を擧んに



天造洲の五大國も分區れ其一とコタヤ教國といふ其二を
 カヅリツキ教國といふ其三をキリイキ教國といふ其四を
 フロテスタント教國といふ其五をフイク教國といふ一國
 ごとく又教國も區分れ所屬の嶋嶼數多此洲の皇帝をマツ
 トといふ全智全能愛を以て下民を化して地を以て範圍と
 し平常に天國の九重にまします心造洲の往昔十二三宗國
 も分列せしかど目今の合して十六國も分區る其一を天台
 宗國といふ其二を眞言宗國といふ其三を法相宗國といふ
 其四を三論宗國といふ其五を禪宗國といふ其六を融通宗
 國といふ其七を淨土宗國といふ其八を眞宗國といふ其九
 を時宗國といふ其十を日蓮宗國といふ各國おとに或の兩
 國或は數國も分れ嶋嶼亦多し此洲の皇帝を大覺世尊とい

其智三世に通達して恒に十方微盡世界を遊で妙法を宣
 布し法華を供養し自利々他圓滿の覺位なれば衆生を愛愍
 し玉ふこと一子の如く三世十方法界を以て施圖とて常
 涅槃の都位し玉ふ心造洲の乾に方て大賑國あり二ヶ國
 に別區る其一を神國といふ其二を儒國といふ神國の皇帝
 を天御中主神といふ儒國あり三皇五帝ありて皆聖人あり
 扱も彌二郎兵衛北八の兩人は漸く天造洲ニダヤ教國神待
 の港よ着しければ大に喜悅して仕度手早輕氣球を出て宿
 引に誘れて旅宿よ到りし頃ハ重度正午十二時なり直に中
 飯を命し膳の上よて二合暖させ互よ杯を献酬つゝ北八ハ
 彌二郎よ向ひ北義兄先の無事に着して結構だ已等何邊か
 死に懸たよ併し御影で身体よの障らなかつたが義兄ハ千



渡氣色でも悪ひのか 彌別段と云ふ事もねいが所勞た
 のでもあらふ身体が撲れたよふだ併末已等此天造洲とい
 ふ地のも少し繁昌な處かと思つたに寂ひ處だのふ 北天造
 洲が悉皆寂ひといふ事もあるめい併し已だつて初てだか
 ら知らねいがフロテスタント教國へでも往たら繁昌は相
 違ねい此ニダヤ教國の寂ひも無理もねいのだ自國に居る
 自分に歴史で見て居るがニダヤ教國の薩張だ 彌併此國が
 天造洲の本城ではねいか 北うふさ第一古ひ國ではあれど
 今を去る千八九百年已前風俗傷く衰頽して驕奢の一日
 に極天と其人々の言に曰く人の此世に在るは一場の宴席
 の如きなり唯尊ふべきは勢力のみ唯看ふべきは愉快のみ
 勢力あらへ自ら富と富あれば自から愉快あり何の富か勢

力を以て得られざらん何の愉快か富を以て得られざらん
 道徳や節義や唯愉快を調和するの具のみなど無法の言を
 吐た卑沙は神様を看判として金設を爲し信徒の罪又罪を
 重ね欲ふ欲を發して上帝を怖れず適々基督の降生あるも
 反て之を悪魔と誤認し公に訴へて罪なき神を磔殺し其無
 法極りなければ遂に上帝の赫として基督に依りカヅリツ
 キ教國を開國し玉へるかり故に此國は其後いよく衰へて
 範圍益々狭まり此様なる有様なかつたんだ 彌成程夫で分
 明やしたすりや此國での基督を尊ばないのだね 北そうよ
 尊ふ處だねい前にもい如く此國民は基督の奇跡に驚き
 反て悪魔と思て居るのさ 彌併矢張救主とか何とか云てか
 るではねいか 北そうさ矢張救主を待て居るのだから唯基督

を救主といふ事を知らないのだ經典中に靈子の降臨の度
 あることを説けるより其初は基督にして豫言に應ずる
 を知らで今猶救主の降臨を待て居のさ實は馬鹿といひ
 ながら又不愍な者ではねいか彌成程此國の人民が的にも
 ならぬ救主を待て居るのも馬鹿だが亦誰やらの様に耶蘇
 を救主と思つて的ならぬ者を的として嚴手救主の目の前
 へ在るを知らないのも誠に不愍だハハハハと笑ひければ
 北八も亦惡笑ひしながら北義兄好く加限に酒を止まして
 何處かへ見物までも行だねいか長時敷酒を呑て居ると又
 無用ねい議論が爲度なるから而して義兄も最早已等な
 議論せざとも何程愚智者此國でも失敬だが義兄と話し
 する位の神學家もあらふから外街でも出て見物旁教命へ

でも往て見よふ彌大變眞面も出るねい左様云われりや否
 ともいわれぬそんなら酒の止にしてか飯など食べそ
 ろく出かけよふかねと夫より兩人は食事を済み案内者を連
 れ彼所此方と見物に行にける抑も此國は五ヶ國中の狭國
 として東の皆洋も臨み西南はカヅリツキ教國も接し西北
 の迷海を隔て心造洲の天台宗國に對面し五ヶ國中最も東
 北に位せる端國なり而して此港の名を神待の港といふ戸
 數凡三千軒人口凡十五萬隨分繁榮すべき大港なれども總
 て當國の風俗惰弱にして往昔は識者も出し土地なれども
 日に一日に衰頹して智識も道德も其も地を掃ひ妄想の雲
 霧は日夜に繁く大旱も雲を望むが如く人民皆的よもなら
 ぬ事を待ち忘信深き徒あらば總て神の使と尋ひ少く知識

を研き道理の云何を論する者あらば一概之をサタンと嘲
り爲す各國との交際も深からざれば愚の益愚忘の益々忘
り陥り現今よての誠まされ無量有様にぞ墮入ける

八章

扱も彌二郎兵衛北八の兩人の案内者の誘引に順ひ名所舊
跡彼方此方と遊覧爲巡り市街を隔ること半里程の所は深
々たる森あり其内は荒果たる堂宇ありて久しく修繕もせ
ざるどみへ柱腐壁破れ屋根露り草茂々と四傍は繁り狐狸
の住家とも思しき所に至りけるに北八の氣味惡顔よて北
「こりや何だ此様な穢ひ處の見たくもねい併何を曰く因縁
でもあるといふのか」案はい此處は往昔今を去る事凡一千
八九百年前耶蘇と云ふ惡魔が御座りまして數々日方の魔

術を現し多分く我國の
人民を惑し遂は此國
でも奪る心組で御座り
ましたが自分勝手に我
は猶太の王なせとい
所々を徘徊致せし故遂
に公に於ては其惡魔を
捕へられ此所は於て磔
木に懸りました然るに
隣國杯での其惡魔を上
帝の子だとか救主だと
か申て大變信じて居ま



返る夫故實は八百年程前一度不幸にして此地を隣國に畧
 取らせし時隣國の人民が此様な堂宇を立て切きり敬けいを致
 し居しが其後また我國わがくにも回復くわいふくしてより唯一人として擣こふ
 者もなく夫故此通とほも荒破あらいやぶて居ゐまするので御座ござります即すなはち
 耶蘇イエス惡魔アクマ磔はりつけ殺ころの舊地ふるちといひ此所で御座ござりますと何意なにがなく
 因縁いん縁を口に任まかせて陳のたまければ北八きたやちの面色おんしやくを變かへし雙顔たごも涙なみだを
 浮うめ北すりや此所こゝか耶蘇イエス惡魔アクマの磔はりつけ殺ころに懸かり玉たまふ地ちが案あんは
 い耶蘇イエス惡魔アクマの磔はりつけ殺ころせられし地で御座ござりまするといふも北
 八きたやちの思おもはず涙なみだはらくと何思なにがひけん堂宇どううの前まへも跪ひざまずき大地
 もひれ伏ふし何か切きに涙なみだと共に禱いのちを爲なしぬ彌や二郎にらう兵衛べいゑの今
 案内あんない者の言ことばを聞きて其儘そのまま北八きたやちの涙なみだを垂たれて堂宇どううの前まへに跪ひざまず
 しを見て此こゝ奴やつ一番いちばん弄なつてくれんと無音むおんと堂宇どううの後うしろに廻まわり壁かべ

の破やぶより堂内どうないも忍しのび入り親おやひ居ゐるとい神かみならで知らぬ北八
 は一心いしん北きた我等われらの神かみ耶蘇イエス基督キリスト我等われら不幸ふこうにして東洋とうやう日本にっぽんの偶
 像ざう教きやうの巢すく屈くつに生なれ我等われらを創つく造くり玉たまへる眞實まことの上うへ帝ていあるを知
 らぬ亂みだりも偶像おうざう教きやうの妄信まがしんを信まをせしこと其罪つみ惡例あくれいひ地獄じやくに墮
 して無む限げんの苦くるしみを受うるも私わがし誰たれを怨うら望む者ものもなきも汝なんぢ耶蘇イエス基
 督きとくの罪つみなくして磔はりつけ殺ころせられ玉たまふ血ちと私わがしの信まを仰おほとに依よて
 罪つみを洗あひ玉たまひ基督キリスト乃すなはち名なも因よりて我等われらも無む限げん生命せいめいと無む限げん樂らくと
 を與あたへ玉たまふ之これ皆みな靈たま子こ耶蘇イエス基督キリストの惠めぐみと恩おん謝しゃし奉たてる然しかるも此
 國くにの人民じんみん汝なんぢの靈たま子こなるを知らず汝なんぢも對たいしての無む禮れいする者
 を懲こさんと思おもひしが汝なんぢの誠まことも汝なんぢに害がいする者ものの爲ために祈いのち禱たう
 せよとあらば私わがし此こゝ者もの等を汝なんぢの誠まこともよりて許ゆるしまする汝
 幸さいに之これ等の者ものを恐おそみ玉たまとす之これ等の者ものを難がたし玉たまはす汝なんぢの愛

を以て之等の者を以て其罪を悔改めさせ與に天國に導き
 玉ひ無限生命と無限樂とを與へ玉へ私し今同胞兄弟の爲
 に救主耶穌基督の前に祈禱り奉る幸に汝の愛を以て私し
 の祈を了取し玉いんことをア・メンと不亂に禱る其折柄
 不思議や堂内に燈ありて地球東洋世界日本東京の基督教
 妄信徒北八汝が祈委細間届たり併し今汝又對し一言誠むる
 事ありと聲爲けるよ北八は仰天し俄に面色土の如く思ひ
 中大地よ降臨彌二郎兵衛の戲所作との露知らず北我等救
 主耶穌基督我等の祈委曲間届られ我輩が幸福何事か之よ
 比する者あらんや然るに我等信仰深く上帝の救を祈る者
 をして妄信徒との玉ふり云何なる譯にて候や我等今全能
 の救主に對し此事を問ひ奉るは敢て我漫心より問ひ奉る

に非ず又不満を訴るよも非ず我等が妄なる處を救主の誠
 示により之を悔む改め彌々上帝の恵により信仰を堅固よ
 せんと思ふなり我輩の救主耶穌基督幸に誠示あらん事を
 ア・メンと慄ひながら祈りければ彌二郎兵衛は北八の眞
 實の救主と思ひ驚死けるよいと笑しけれども可笑さ忍び
 作聲して彌今汝ちの誠示を受んと思ふ處我一々に誠示せ
 ん汝心を沈めて我誠示を聴聞せよ汝亂に基督教を信すと
 雖も實は眞の基督教の眞理を知らず故に我汝に對して妄
 信徒といふなり夫基督教徒の上帝の訛を爲を聞に天地万
 物の勿論道理より時間等に至る迄上帝の造作玉ふ物と云
 う又我等をして上帝の子杯と云ふ我等の生涯に手品の如
 き事を爲せしと云つて之を神の奇跡と稱去我等磔殺せら

れし後三日目も蘇生せし杯跡形もなき虚言を吐く等是皆
 後世貪利の神學家の我を看判として人を誑惑せし妄言な
 り何とて左様の事あらんや上帝智なりと雖も何ぞ天地の
 道理を造作し玉はんや然れとも上帝の全能なる作る能
 はずと云ふには非ず道理は自然の定理なれば決て被造物よ
 と非ず之と並び立の上帝にして又決て差別あらず上帝の
 即理々の即上帝あるが故も天地万物の悉皆之が爲も造作
 らる理なるが故に上帝の全智全能なり全智全能なるが故
 も賞罰も亦自由なり然るに人の敢て之を曲げ強て道理の
 外も上帝を立んとす胃潰の甚き者なり故に人の上帝を云
 て偏頗の神なりと論じ上帝の全智全能に非ざると云ふ甚き
 に至ては番罵譏謗して誤て惡罪も誦るの徒あり嗚呼之誰

の罪ぞや上帝を妄造せる者の科もあらずして誰ぞ否汝ち
 等如きの妄信徒の罪なり而して我をして上帝の我世マリ
 ヤも依て降生爲玉へる者とし強て神子と云はんを欲す故も
 世マリヤの未だ父もセフと聘せざるの先も我を懷孕し者
 とて上帝の我父もセフに告るの夢事を仕組妄事をして徹
 頭徹尾之を爲す遂んどす我決て神子も非ずと雖も終身宗教
 の爲も辛酸と嘗まものなり當時羅馬大に衰へ人民皆無法
 の所業を爲し道德は地も墮ち節義の何物たるを知らずへ
 プリユウ人の上帝を信せず淫社俗祠を祭て不義の福を求
 めんとす我故に一視同仁の説と主張して祭司長或は卑劣
 を攪醒せし事もあり貧民又の病氣の人を賑し事もあり後
 遂に祭司長等の誣る處となり磔殺せられたり然れども我

何すれぞ神子にあらんや前も云ふ處の上帝にして何すれぞ子位このくらゐあるべき道理なき然りと雖も理の人も依て顯る顯る處の理即ち神の子位と云ふも障さやなし然れば當時或は我の道理に依て道を説けるを使徒等の尊で神子と云へる者よして我形体をして神子と云へるも非す我に依て顯るの理を上帝の子と云へるなり故に上帝の子は千八百年の往昔のみも非すして常住じやうじやう不斷ふたんにに人々に依て存するなり我何すれぞ手品の如き魔術の如き無道理を爲さんや手品は道理なりと雖も似小兒おとこなきなり魔術の好まざるなり否其様なる無道理の我知らざるを蘇生せよ杯昇天せし杯當時の少しく衆に超こる者あらは其様なる事を云へるの敢て珍事ちんじとすべきに非す例せばアレキサンドル天王の「シユ

ビトルアモン」神の子なりと云ふ理學家「プラト」は「アポルロ」の神靈に因て懷孕せしなど誰の神の子誰の天に昇る杯皆當時の風弊なり今日より之を考るに笑敷次第なりと雖も當時は充分に尊敬せるの言なり我使徒達の新約全書も記せるの當時は風俗も順へるなり然るも今日よして其所以を察せず強て我を奇怪物となす之汝が悔改むべきの要務なり往昔の左様の事を云も支問しもんなきも現今も至ての大人を惑まどふの具となれり歎なげすべきの事にあらすや見よ不義者でもなき世「マリヤ」を不義者と謂り問拔もんはくでもなき父「ヨセフ」を問拔者と誹そとるか如き而して我等死に至るまで宗教の爲も辛苦を嘗あじし事の一割水泡すいひやうに屬せしめたり嗚呼汝等我を敬せるか否識者をして我を誹謗せしむるなり我を誹謗

せしむるのみならず全智全能の上帝を耻辱するなり寧汝
 等如き徒よりも我を悪魔と爲し我は不敬を加へる當國の
 人民を勝れりとする人情人の我を誹謗すれの識者反て我を
 怒み汝等如き妄信深くして我を敬するは無道理を云は
 識者反て我を嘲る其我は對するの是非果して云何ぞや之
 即汝の妄信徒なる所以にして悔改むべきの一事なり併し
 汝一人に非ず基督教信徒中往々皆爾なり實は我意に叶
 ざるなり我意は適せざるのみならず天主上帝の靈意も
 之を赫怒王ふなりと口に任せて喋々不都合演説はと陳
 執るしそつと戸の透より覗き見るは大地に北八の踰踞居
 ければ彌二郎兵衛心中に謂らく我少しの得意勝手をも難
 りしかど亦滿更は前刻よりの言を以て無道理とも云ふ難

し我曾て北八の基督教を信するを悔悟させんと思へども
 彼信仰固くして中々悔悟するの氣色もなし今彼の我誠れ
 を爲すとも知らず眞實の基督教と思へるを僥倖ひ衣服を前
 後に着し面を畫取り扉戸を開き大聲を發して出ければ彼
 必ず驚愕て一時悶絶なす相違なし而して我復裝を改め
 之を介保し正氣に復せし後知らざる眞似して親懇に之を
 論せしなば或は彼幸に正道に歸する事もあらん其所行甚
 悪戯に似たれども徒は驚愕なさしむるに非ずして其實彼
 を正路に導かんとの善行方便なれば諸神諸佛も敢て透め
 玉ふ事もあるまじとらじやくと心は點頭手早く衣服を前
 後よし堂宇の隅の煤を取り而眞黒に熊の如く木盤は叱咤
 して出けるよさして驚く氣状もなく唯躊躇て居候るにぞ

之の不思議早前に我一言を發せしとき氣絶なしたる者ならん不審き事ならんと蒙りし笠を取除ればこはるも云何にこわ云何に北八からで自分所有の風呂敷包も笠のみ蒙らせし者なれば彌二郎の驚然仰天顔彼奴轉て我を一番懸居しかと近傍を見るに北八のみか案内者の影さへ見へま遙に十五六町向なる島路に兩人の相の視へければ彌二郎兵衛の泡立しく衣服着更る間もなく面眞黒なる其儘にて荷物片手に笠片手にしいくと進行ける

九章

爰又北八は一心不亂に堂宇の前より跪き祈禱を爲せる其折柄堂宇の内に聲の爲けるに驚きて覺へず大地は踏踏りて開居しが心當平常彌二郎の基督教を妄端なり邪説なり

と口に任せて我を嘲けるを今此基督教の言を聞かしめ其上帝の眞實なると基督教の眞理あるとを知らしめばやと恐怖ながら頭を上げ見れども近傍は彌二郎兵衛の相の見へざるも不審て案内者も問ひけるに堂宇の後に回りしと云ふ北八の心附そつと堂内を覗ふども去らぬ彌二郎の夢中となり切も喋々居しかば微笑しかなら彌二郎兵衛の荷物を自分の座せる跡も置た笠を覆ひて其儘案内者を誘ひて早くも森を離る事十四五町も行けるか案内者の北八に向ひ案内し擅那今御一人の擅那はどうなされました未だ御貌も見へませぬね北八そうか彼奴の間拔だから先前已等が堂宇の前で座して居た間に堂宇の内に入て基督教の似聲をつかいて已等を誑す積さ處が已等夫を知たから彼奴毎

度己等を馬鹿にするから一度懲めてやらふと業と承知で御前を誘て先へ來のよ併し餘り行過と眞實に迷ふと可愛想だ案ハハハ成程左様で御座りまするかすゆや各位の基督教を御信じなされまするか北何の宗教信徒と云ふ様な者でもねい併此度宗教界各國を遊歴してよるしき宗教を信する積だが此國に宗教の話でも爲てくる人でもあるかね案うれい多分御座ります神待の港神待町の教會に居らるゝ「ボ」ルといふ教師の随分博識の御人で御座りまする而して日曜毎午後六時より説教が御座ります北うか夫の好都合だ何卒復案内をたのみます案へいふよろしふ御座ります併未だ擅那は見ませぬねい何を爲て居しやるので御座りましたよ北うふさ未だ喋々て居のたら

ふよ案擅那最早彼是六時前で御座りましたよ少し御急ぎなされませぬと未だ宿まで廿五六町も御座りましたよ市中へ入ますれば氣遣は御座りましたと野路は狐狸が澤山居まして困却まする其中にも此路なんぞの特別は日暮時分から大變好く誑す狐が居と云ふ風説で御座ります北そうかぢいつの要心せなけりやいけねい併未だ氣遣はねい口には云へど心の内早くも億病風は誘われて只何となく潮氣味悪く殺と吹來る夕風の野草を吹てそよくと遙に喚呼牛の聲薄暮を報す鐘の音を聞につけても彌悲しく今更彌二郎兵衛の親しくしてとぼく歩行其所へかゝいくと馳來る彌二郎兵衛の相貌を見北八の驚き慄ひながらそりやこそ御出た怪物が弱身を見せての叶はじと思す聲を振

立て北何だ彌二郎兵衛だと好くも出来た成程一寸義兄に
 似ては居れど畜生と云ふ者の妻らねい者だ顔なんぞの人
 間の顔よりはなつて居れど真黒いだけの流石の畜生だそし
 て衣服の着様の何だ前後にして置きやがれ彌これく北八
 よ已等狸でも何でもねい一寸此荷物を持ってくれ之の深
 い譯がある事だから北何だ深い譯がある狐狸又譯も何も
 あつてたまるものかそして荷物を持ってくれなんぞと石で
 も持そふや思つて其手は桑名の焼蛤だそんなにかゝる地
 球日本の北八さんだねいぞ彌貴様なんと云ふ事だ確乎目
 を活て見るか云よ已等と狸との大体分別りふなものだ馬
 鹿らしひ北何だど已等に目を活て視ひ目を活て見て居か
 ら何程怪ても義兄と狸との區別が附のだ愚頭くぬかすと

撲殺してしまふぞよと
 中々聞入べき氣色かけ
 れバ彌二郎兵衛も殆ど
 困じ果たる其ところへ
 案内者の異人の何處よ
 りか古繩を拾ひ來無闇
 に彌二郎を縛らんと爲
 けるよ彌二郎兵衛の大
 よ驚き彌云何するんだ
 奴等縛らるゝ覺へは
 ねい併狐狸の怪物とで
 も思ふのかわ知らねと



も最早好く加限も喰てもよからふ馬鹿らしひと問くを無理も引据て雁字搦に引縛り案何だと論てくれ最早往生したとみへるね成程論てもやらふ乍併奴に問ねバならぬ事がある擅那の遠方の御人此度當地へ御遊歴も御越なさつたんだ然るに奴が今相貌をやつして居る彌二郎兵衛と云ふ擅那の千波間振じやとふだ夫故奴が誰かし何地へか遣り其彌二の擅那も怪け又此擅那と誰かさんとす然るも自國の御人でまい故怪損なつたが奴の運の盡きさあ擅那の所在を云へばよし云はねバ奴撲殺してしもふぞと云ふに彌二郎の笑しく又腹立しく先刻よりして數々も怪物もあらざる所以を陳けれども益々疑惑深くして遂に雁字搦も引縛り縛られてみれば爲方なく此處らで智恵の振ひ處知

て爲居るが知らぬで我眞實の怪物なりと云ふ俵外殿にて却し見て驚き逃れはるれでよし若亦承知で爲業ならん必ず笑ひて事濟べしと漸く心一決して太喝一聲恐じき聲音にて彌次等何故なるや我が無禮を爲す我今彌二郎兵衛の相と省じ汝等兩人を誑惑すの唯一様の事におらむ我先も彌二郎兵衛を堂宇の内にて引裂食ひ又汝等兩人をも食はんとの存念なり我通力あるが故も他人も身を省す事自由なれども業と汝等兩人も不審く思はせんも怪損ひの相となるも兩人の心を油斷させん爲なりをれども知らで思頭く神し我圖に當れし汝等が不幸我今通力を以て縛じを解き直も汝等縛らんとす即ち我ころに幸有餘年彼森に住む耶蘇狸とわ我事なりと云ふと加し其勢に由廣たる

繩なればはつちり切とよ兩人は見て愕然こりや溜ぬと一
 目散雲を霞と逃去ぬ迹に彌二郎兵衛の似笑と彌馬鹿な奴
 輩だすつては事て惨忍目に會ふ處だつたが我圖も當りて
 逃去しは心持好い事であるぞして今案内者の云ふには彌
 二郎兵衛と云ふ程那の間拔だと何をぬかし居のた北八奴
 が其様な事ぬかしたとみへる併し間拔と云ふも無理もね
 い無用事して狸だの何のと云はれ其上も異人に縛らるを
 利口ども云ひれぬ併餘程暗くなつてきたと衣服を着改
 畷に流るゝ水を以て顔を洗ひ荷物を存にとぼくと行せも
 く野原まで里と思しき處もなくふと谷川に行當り先へ越
 へんも橋とてなく渡らん様も水深ければほとと一息立留
 り何時頃と懐中の時計を見るにこね云何に早や十二時

の處よあれハ驚きながら熟々視るに捻の嫌けて止り居り
 ぬ

十章

時は知れ候と釣月の早や山の端よりうすつき頃風そよくと
 木葉を噺し所々に徘徊狐火の滅として又點し途に嘯く
 狼の聲も次第と近くなりさも恐しき野路の夜彌二郎の氣
 味悪るく彼方此方とさまよひけるが突然谷川も行當り橋
 もなけぬハ渡もならずふつと一息茫然と川邊をながめ立
 留り彌最卓何時であらふか時計の有とも止て居るし彼月
 の模様では彼是十時頃でもあらふ今の先日が暮た様と思
 て居るも併云何路を取違たのか暮は市街まで十四五町
 よりしかないと思ひ居ると今迄歩みし路程の屹度一里の

餘もあらずに未だ市街へ着きいとは實に不思議な而して
 來なみの此様な川はなかつたよ此の鹿鹿角が遠く居る
 に相違ぬい嗚呼困却たものだ北八の最早旅宿に歸り分頓
 の油然と足ても延て寐て居よふのに馬鹿らしひ不用事を
 爲したばかりよ此様な苦勞をせにやならぬ併幸よ此川は
 橋がない故深く路にも迷ぬと云ふもの若橋でもありもせ
 ば無方よ路に迷ひ入り必ずあの狼の餌食と未あらず者を
 徙昔孔子が術を去りて趙及往かんとせられし時或河は臨
 て美なるかな水洋洋たる丘が濟らざる此れ命なりと歎せ
 られしが我も亦此河を濟らざるの之氣命なり否矢張因縁
 の然らしむる處であらふ孔夫子と王道衰て諸侯強を争ひ
 戰國の世を憂て道を説かぬが爲六國は吟ひ玉ふ我は社會

の道義衰へて妄雲日夜眞理を覆ひ宗教社會の戰爭を憂ひ
 道を聞かぬが爲よ今宗教世界に吟ふ嗚呼六國を合掌する
 者は秦なり鹿を中原よ捕る者は始皇なり宗教社會現今互
 に其理を争ひ居るか果して之を合掌する者は誰を鹿を中
 原よ得る者の誰人なるや思ふよ此よ至れば長大息するも
 餘ありと暫く默然と立留まりぬれよめして路を取回し
 復も行事二里餘り覺す山路の林に掛りけるに又も驚然顔
 を頻め彌此奴は殆ど困却たものだ亦取違たよ見ゆる海岸
 へ行のだから此様な山路へ來をふな筈はなし一帶方角は
 如何なるかしらんと指南針を取出し見んよ是するも己に釣
 月も陰没ければ唯星明りのみよて確と分明す時計の有
 れども止てしまひ指南針の有れども暗くして見る事能は

腹の空ども食する物とてなく煙草呑ふにも火氣なく足の
 痛て進み兼ねるしといふ宿るべき家もなく併前刻から氣
 味悪そふき所を彼れ是れと通行て來たが別段怪異物にも
 出會ず隨分狸狐の出るふな所もあつたよ此彌二郎兵衛の
 確乎したる精神も驚き出るにも出られぬと云ふ様な事か
 男兒三日見ざれば目を拭て視るべしと云へる事もあるが
 此彌二郎兵衛も前日の彌二郎兵衛には非ず懐古すれバ地
 球西洋に遊歴せし時分杯の馬鹿ばかり盡して何事も意も
 介せず唯一時道の事よて敢て之と云ふ目的も無れば盲人
 蛇に恐へず聾人雷を怖れずの譬の如く反て氣樂な事であ
 つたが今回此宗教世界の遊歴の誰も依頼するものはなけ
 ねど自分勝手に此大任も當り何卒宗教の全体をして實地

見聞し委曲は知れずとも畧其要を知り人にも亦之を知し
 めんとす併先にも云ふ如く我等は社會に滑蕪を以て鳴る
 者と雖も現今の御影で宗教信徒の一分となれば前日の如
 き無用の戯を爲さず最より破道徳らしき事の追々慎む覺
 悟なきば自から抱服絶倒の事跡も少なからん併ながら最
 より無學無識なれば理論杯の出來ず其方は得意なる滑蕪
 手斷又て方便の爲なれば將來云何なる事を爲出かも知れ
 ず現に今日も其手斷を以て北八の日圓迷ひ居る夢を覺さ
 んどせしに反て我智慧の淺かりしより今猶如是迷惑も陷
 れり嗚呼誤てりくと歎息しながら思わす袂も手を入れれ
 ば指に障し附木箱彌二郎兵衛の大に喜びつゝ傍なる松根
 に腰打懸け煙草入を取出し煙草たつぷり煙管よつめ火を

指附で呑んどせしよ今迄暗くして見へざりしが今摺付火にて傍の松影と朦朧と容貌現す磔死相好彌二郎兵衛の見て愕然きやッと一聲叫しが其儘悶絶なしにける早三更も時過て四更五更と東も薄明曙告る鳥の音呼と叫へど耳よの入らず近隣の村人は通りかより見て驚きこれ救蔵さん一寸見さしやい妙な風体の者が死で居やす前夜は奇妙な夜だ宵よの御前さんの戸口よ一人の異人が倒れて居るし今亦爰に一人の異人併同じ様な風体だ朋友でゐるめいが救成程く相違ねい助三どの云ふ通り衣服から身の廻り少しも變らぬは何でも内よ居らるゝ客人の連に相違ねい可愛想に疵とでもなく又病氣でも為そふな矢張何耶に愕て悶絶したよ相違ねい何か御前さん薬でも所持て居な

いか助三驚さ己等何持て居か若らん有たく爰よ此間地味日本國から渡來致した寶丹が在た之を吞してみな己待水を汲で來よふから救よしく己等にかしな吞して見よふと手に受取彌二郎を抱き抱し指にて口を開き吞さんと爲けらも自由ならず彼是爲居其間に助三の水汲來り助救彌郎をんせうだ氣が附をぶなか薬は吞したか救未だとも薬ばかりの吞されな水にでも解て吞せてやらふ御前一寸此身体を抱て居てくれ助おつと承知くと救蔵に交り身体を抱き居けるが救蔵の寶丹を水に解し口を開きかふと一吞をしつと聲を張上げ救蔵人を叫ぶと呼ぶに又助三も同じ通せしか彌二郎のばちか兩眼を見開きと近傍を見廻し

又兩人の顔を視て氣の
附し様子なれば衛人は
喜ひて救旅人氣が附や
したか氣さへ附は重疊
くじ等も是で安心致し
やまた而して其許は何
地の人なるや名を何と
云ふ左支問なくば語り
至へも同けるに彌二郎
兵衛は叩頭しながら生
國姓名は勿論弟北八な
る者と當國遊歴を始め



昨日所々を見物の路に踏迷ひ此處に於て磔殺人の幽靈に
出會ひ悶絶せし所以を語りしかば兩人の心に怒み且笑ひ
救藏の彌二郎に向ひ「救旅人其許の磔殺人と云はるゝの彼
物に何やらさるや」と指もて示しければ彌二郎兵衛の未だ
居かど驚く後をながむるよふところも云何は磔殺人はあ
らまして所の牧者の牛皮を靴せる物なれば彌二郎兵衛の
今更面目なげに彌まことに御恥しめ御座ります乎平常徳病
な性質故何でもねい物に愕きやして貴方なよ色々と御厄
介を相懸實と申譯が御座りやせぬ勘どふしてく御前さん
に限らず誰でも夜分に此様な物を見たら驚くはさ豈んや
勝手も知らぬ御前なりや無理は少もねい面して前夜十時
頃で有たか此救藏と云ふの巨目御前に好く似た矢張地球

日本とかの人が倒れて居たが救蔵せんが助けられ今内に
 居らるゝか万ま一つ今御前の云われし御連の衆もろでいあるめ
 か未だ其人に委曲まが様子も聞ないが兎も角に御前さんも
 救蔵せんの屋やまで来なさらぬかすれば様子も分ると云ふ
 ものと話すを聞て彌二郎兵衛はそんなら北八も彼時より
 同じく路に踏迷ふひ共も此様な處へ吟なげひ來しか定めし彼時
 戯たは彌二郎兵衛は引裂ひき食くひしなど云へる故正直な彼奴
 の事なら眞實まことに受け喚よ縁ゆかりりなふ思て居ふ早く出會て安心
 させんと我身の辛くる苦しみに比較くらべ今更北八が不惑ふになり彌御
 兩人の衆もろとやら附揚つの様なれど御世話も預る旅人とや
 らが拙者の弟の様に思おもゆるし且御禮も數々かず申度御邪
 間ながら御屋迄御供致度御座りやすな敷なさあ何の遺慮いが

おらふ百姓家の事なれば甚た不潔け敷しあり何にも捕とら
 出來なひけれど構かまりしやらねば何時いつなりと助たすけ
 村中での慈悲深い救蔵せん難氣なき人なら我身を捨てて救
 めと云ふ御人だから何の遠慮とんがあるものか彌やわがと云
 御座りやす左様なれば御言に驕あへ御供願度御座りやすと
 云ふに兩人は先に立たさあく此様來なされと後のちはりの彌三
 郎兵衛とばく隨まひ歩み行いき爰こゝも亦北八は昨夕きのう彌二郎を狐
 狸きつねの怪物きと誤認あやまして雲くもを霞かすみと一目散ひとまに逃にげし
 が案内者を見失あひ早はやや日も没なし薄暗うすがり此處こゝぞと思ふを
 的あはして凡ただそ一里いちり餘あまも走はれども市街いちと思おもひき所ところ見みえ
 即ち彌二郎兵衛の行當いし川がに至いたりこの路みちが違ちがひ後のちは
 しせ亦またも走はり重おも度おも彌二郎兵衛の川邊がに至いたり頭港あたまを隔へる事

一里半餘西南に當れる猶太教「セイント」を祭れる「セイント」山の麓なる山下村にぞ着よける北八は大に喜び彼方此方と家を覗ひ今夜一夜宿らんものと尋ね行けど白川夜舟夜更て通ふ人もなく泣の涙でとぼくと彼方の軒よの暫く休息此方の軒に立住つゝ即ち當村の慈善家たる山下救蔵の高塚際に到りしが牛の苦聲よ驚きて悶絶なせるを幸ひ又同村の西森助三の子供が俄の腹痛よ醫師を招きて歸り路倒人のあるよ驚き則ち救蔵をも呼起し己が連たる醫師に依頼し氣附薬を呑しければ最より無病の唯一時物に驚きて悶絶せま事なれば直又息を吹かへし其儘此家又世話よなりぬ扱も彌二郎兵衛の救蔵助三の兩人に連行れ四五町西南よ至處よ即ち山下村山下救蔵の戸口に着にける救

蔵の先よ内に入りて救こりや女房よ異人の御客の居らるゝかの女ハイ居らるゝが御前大變早く御歸だね何を忘失物でも出来たのかね救何よも忘れはせないが異人の客人よ會していと異人の御客を亦一人誘て歸て來たと云ふの戸口よ向ひ救助三さん御客をつれて入て下されと云ふよ助三の彌二郎兵衛を誘ひ入來る女房の見て女助三さん松市ちゃんは少し好ゝかへ前夜は御心配中色々御邪間な事を助なんのく救蔵せんよ較ぶれば邪間の何の云ふ事か有者か松市も御影で今朝は餘程好ゝ様子だ女てふかへ夫は好つたねいと云いつゝ茶を汲來り彌二郎兵衛よ對ひ女「あなた好くいらしやりました御茶など御呑なされませと戸口よ互に話し命ふ北八は先刻より雪隠に行居しが何

事ならんと窓よりうつ
 と覗き見るゝ死せしと
 思ひし彌二郎兵衛の腰
 打懸て茶を呑める相を
 見て驚然は是の夢か無
 性か泡て雲隠を奔り
 出来り北御前の義兄だ
 ねいか云何して此處へ
 好まお無事で居ては
 た巳等義兄の昨夕怪物
 の爲に殺れたと思ひ居
 甚ふ何だか夢の様に



張解せない 彌貴様も無事で結搦く巳等の事が解せないの
 も無理もねい色々深ひ話しのある事併助三の色々御
 厄介になつたから貴様からも御禮を申てくれ北ぞふか己
 等といゝ義兄迄それは云何もと兩人は對ひ北秘し勿論
 義兄迄思ひ掛なき御兩人の御厄介は相成誠は御禮の中様
 が御座りません 救何のこれ位の事に禮も何もいる者か旅
 行して難義は誰も同し事併都合好く御朋友で有て何より
 結搦女房足盥を持って来て客人に足を洗てもらふが好くさ
 あく客人足を洗て座より話が有るなら油然となされ我
 等の一寸畠へ行って來から彌色々御厄介を相懸まはるねと
 女房の持來し盥にて足を洗ひ拭ひ済て座より彌御主人
 むの直は御越なされますかね 救はい一寸正午迄往て來

やしよ午後ごごの体息で油然御話を聞ましよ助三とんてろく
 行せうか助すけろんなら一寸往て来やしよ御容八油然と私しも午
 後は此家小来て其に御話を備ましよと兩人連立つらいそく
 と鼻へさしてぞ出行ける迹に彌二郎兵衛は女房にやうぼうと野のひ
 色々御厄介に預りやして實に御座りやせん女にやうぼう何の
 これほどの事が厄介であらふか奥へでも往てもつくり御
 体息たいそくなまるが好く併御座りやせん知らぬ他國で無御困難
 な事もあらふね彌やと左様で御座りやす色々辛苦することり
 御座りやすが又世間には鬼もねい者で此家の御主人の
 な人が中ちゆうまは随分御座りやすうら横目よこめで見るとも御座
 りやせん女にやうぼう左様だらふねそれ故か旅行りょぎん爲附た人は暫くで
 も内うち又居る事を嫌ふの成程其様なものか知らん御前さ

んの朝飯と未だくらふ何もねいが一膳御食ごしきべ座敷へ俱
 て置おきから遠慮なしに充分食ておくれよと流石りやく慈善家救蔵
 の女房だけ氣質よろしき愛敬もの彌二郎兵衛も安心し北
 八に誘れて座敷に往き食事を済すまひ兩人の火盆ひばんを前まへと對面たいめん
 ひ互に無事を祝しつゝ不審ふしん北八も昨日の模様を委細話を
 爲ければ間度まんどおとに北八は或の驚き或は笑ひ正午前迄時
 を遷うつしける處へ女房の盥う面めんを持来しかば互たがひ又食事しきを爲居
 處へ主人救蔵も歸り来り又助三も同どうひ来りければ座敷ざしきと
 四人と四目形彌二郎兵衛の救蔵助三の兩人に對ひ彌やと今朝
 の何か氣きの附つあひ處から定めし無禮も致せしかと宜敷
 御免を願度色々北八を始め拙者迄言にも盡されぬ御厄介
 に預あづかり旅中の事にあらざれば何とか御酬ごう張ちやうも致されやし

よふが何を申すも旅中の事今改めて拙者より此段御禮を申
上やすると懇懇に陳ければ兩人は口をそろへ救其様な事
の最早云はずとも云く何か面白ひ珍しひ話しがあるなら
聞して下されと望けるが彌二郎兵衛の頭あたま抓つゝ彌別段面
白ひ話と申も御座りやせぬと左様なれば御望も任し私し
輩の遠とほひ古國ふるくにを去て當國へ來きたし所以ゆゑを御話し申やしよと
夫より月世界旅行の心組が相違して可惜界へ着し止を得
ず該世界を遊歴せしが其國々の不道德家の多きを歎き該
國を化するよは宗教しゆあらずの能ずと思ひ就ては宗教世
界を遊歴してよろしき宗教を信じ該國を化せんものと直
に輕氣球に乗し昨日當地あた來り彼方あつた此方こなたと見物の末あつ如是
の仕合しあと一部初終を委曲うゑきよく話しければ間居救藏助三は或

の驚き或の歎なげと切きな歎稱なげほめなしにける夫よりして四軒頃村
人を案内者あんない頼み無事むじ夕刻神待港の旅宿へ歸りけるが
其夜十時頃より俄然いつに彌二郎兵衛は邪熱じやねつの爲ため打臥うちふけるよ
北八の驚き醫師を招き診察を乞ふよ全く前夜悶絶して山
林やまに在し故其時邪風じやふう胃いされたるなり兩三日も養生せいで
全快せんとの事に北八は少しく安堵し日夜にちや介保けいほ爲居け
るが今日の少しく氣分宜しと彌二郎兵衛は北八を枕邊まくらよ
呼び彌慮やまらず已等の疾病しやびつで貴様に色々世話を掛け實まこと氣
毒どくでこたへられぬい北何の御互ごごだ生身の事だから何時已
等でも世話せわなるか知れぬい其様な事を氣き掛かすと養生
して早く全快してくれな両三日で癒なごる杯云つて居たから
眞實まことかと思て居たに重度今日で十日だ彌心痛いんまてくる

な今日の餘程氣分もいゝ此調子なら明後日時分の全く癒
 るかも知れぬ併玄貴様も過日依頼して置た旅行日記出来
 て居なら此邊で一度送達て遣がいゝ英も待て居らふから
 北不都合ながら一寸出来て居から直に郵送で遣らふ併
 し義兄一寸少し讀から聞てくだされど風呂敷包より日記
 帳を取出し暫時切に讀居しが彌二郎兵衛の大笑ひ彌よ
 し〜夫で結構直に送て遣がいゝ英も今は大阪も寓居して
 いるから其方へ郵送爲て遣てくれと云ふに北八の直も書
 翰を認めて日記を爰に送りける

爺二郎兵衛北八よりの手翰の寫

孟夏之候貴氏彌御安康にあらは候や愚老等無事よ日夜不相變戯手を尽し居候御半
 神被下度原は先年愚老等月世界旅行の心算にて俄國を去りし己來米國に渡行し機

械炮に乗せし處誤て他世界に
 廻き不得止該世界を遊歴仕り
 其後また宗教世界へ遊歴せん
 事を思ひ立則ち本年五月三日
 可惜界を發し無事よ同十三日
 正午宗教世界へ着球其後摺太
 教國神待港神待曲三町目割禮
 屋よ止宿能在候就ては豫て御
 約定申置候別冊旅行日記郵送
 仕候條御笑覽願度以後の遊歴
 日記の例片御送の心積り候間
 御承知置被下度愚老トモ歸朝



の頃は何れ年暮に相成候やふ心得られ歸朝の上は万々申陳べく委曲の日記にて御高覧を仰ぎ候早々不專

再白御紙翰の御序も有之候ハ通二郎兄へ宜敷御鶴膝波下度及御依頼候也

明治十七年五月廿五日

通二郎兵衛

北 八

英 立 雪 殿

編者曰く前文の如く知巳爺二郎兵衛北八乃兩人より申送候間四方の諸君へ御笑覧に供す就ては先日在東京の通二郎許へ此段申送候處該人も豫て諸君御熟知の如き一奇人なれば小生の報知を被見するや否や直よ兩人の後を追んと四五日以前東京を發程致せし趣何れ今後郵送の日記中よは爺二郎兵衛北八通二郎の三人の戲事を記載可有之と編者も日夜屈指相待居候郵送次第無延滞御高覧と相供すべく此段及御披露候也

編 者 非

宗 教 世 膝 栗 毛 界 卷 之 一 終

明 治 十 七 年 七 月 十 一 日 御 届

明 治 十 七 年 七 月 三 十 日 出 版

定 価 三 十 錢

編 輯 人

京 都 府 平 民

羽 田 英

當時大坂府東區農小橋東詰助
林八番地小田辰三方寄留

大坂府士族

村 山 重 武

大坂府市區順慶町三丁目
四十番地

出 版 人

發兌元

大坂心齋橋通順慶町三丁目

兎屋大阪支店

東京南鍋町壹丁目

兎屋本店

函館米廣町

同函館支店

尾羽名古屋菅原町

同名古屋支店

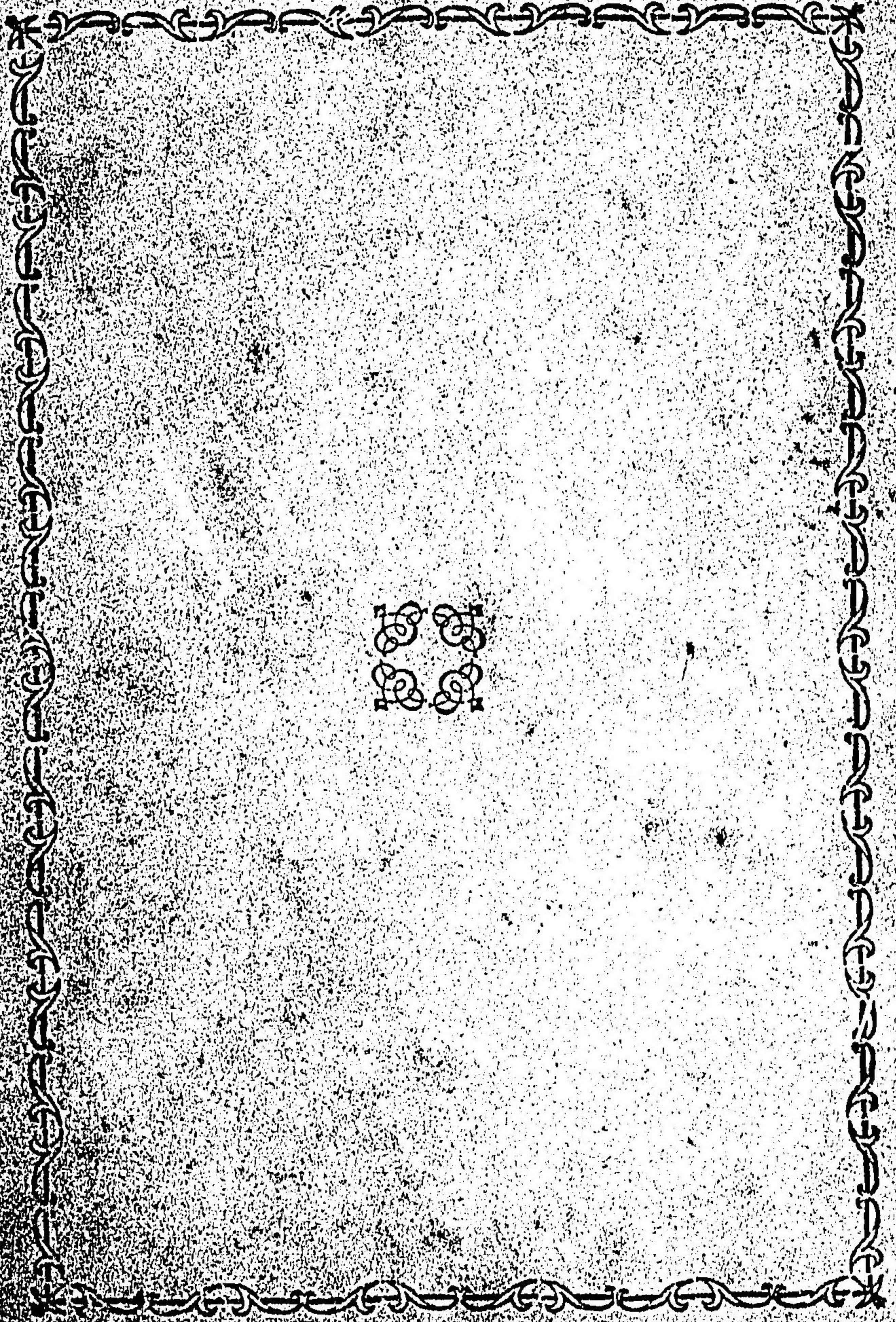
大坂 西京 同 同 同 同 同 江州大津 名古屋 名

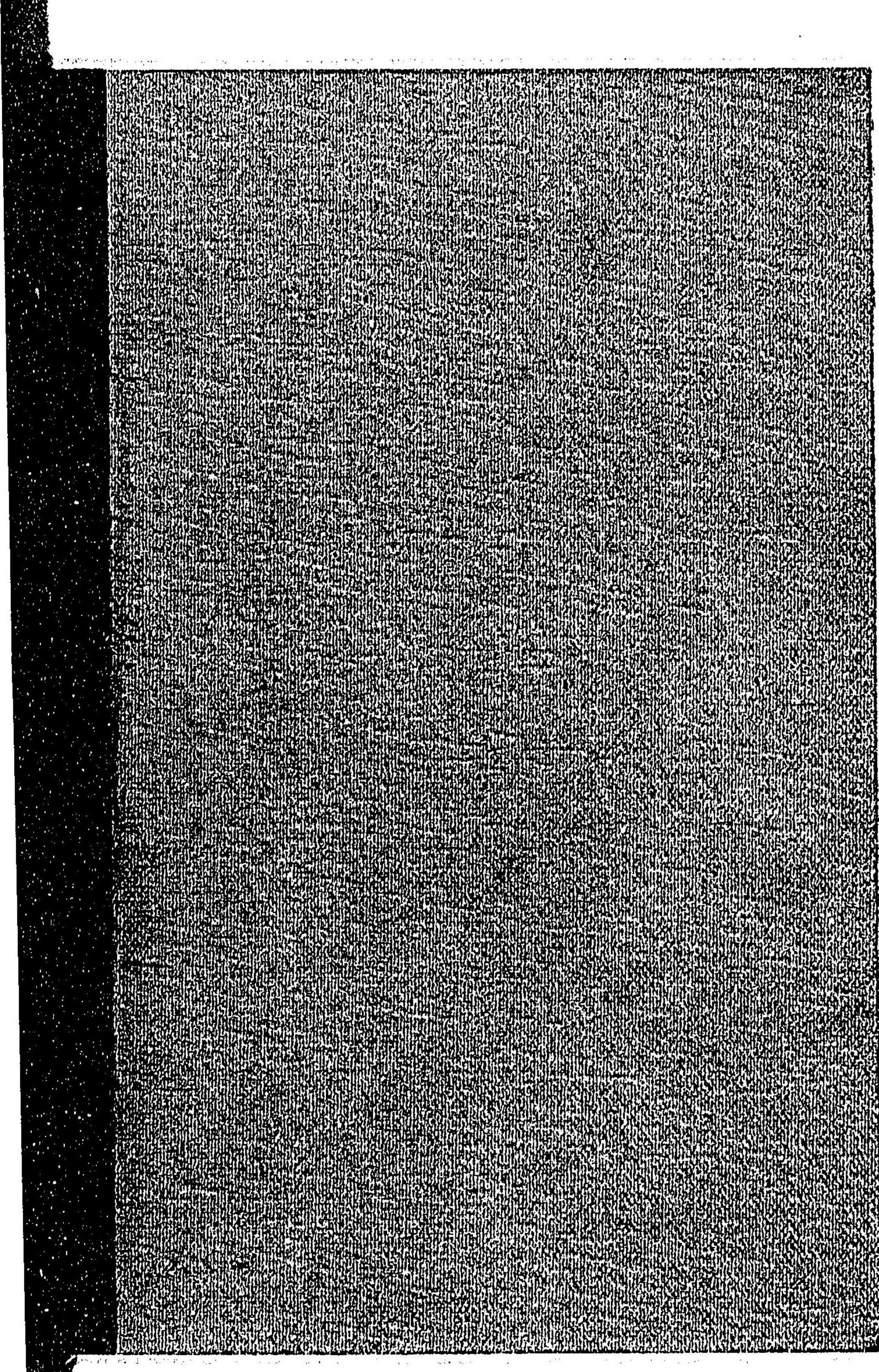
同盟書肆 東枝吉兵衛 内山龜太郎 赤田權七 上田仙吉 青江三十郎 日江三三堂 澤田一三郎 田中伍郎 小澤吉三郎

伊勢四日市 同 播州姫路 但馬豐前 作州津島 土州高知 伊豫松山 肥州若山

伊藤善太郎 淺野東助 山野長平 山利安助 山利安助 横山治平 澤本駒吉 玉井新太郎 津田源兵衛

EX 392





013620-000-3

特29-773

宗教世界膝栗毛 卷1

英 立雪/著

M17

ABA-0089

